みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Race/ Nation/ Imperialism : Development of Racial Anthropology in 19th Century France and its Criticism

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 竹沢, 尚一郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003988

国立民族学博物館研究報告30(1): 1-55 (2005)

人種／国民／帝国主義
──19 世紀フランスにおける人種主義人類学の展開とその批判──

竹　沢　尚一郎*

Race/ Nation/ Imperialism:
Development of Racial Anthropology in 19th Century France and its Criticism

Shoichiro Takezawa

19 世紀なかばのフランスでは，ブロカに率いられた人類学派が発展し，学界を超えて強い社会的影響をもった。それは，人間の頭蓋や身体各部位を計測し，一連の数字にまで還元することで，人びとを絶対的な人種の境界のあいだに分割することをめざした人種主義的性格の強い人類学であった。この人類学が当時のフランスで広く成功した理由は，産業革命が進行し，教会の権威が失墜した 19 世紀なかばのフランスで，新しい自己認識と世界理解を求める個が大量に出現したことに求められる。こうした要求に対し，ブロカ派人類学は数字にまで還元／単純化された世界観と，白人を頂点におくナルシスティックな自己像／国民像の提出によって応えたのであった。

1871 年にはじまるフランス第三共和制において，この人類学は，共和派代議士，新興ブルジョワジー，海軍軍人などと結びつくことで，共和主義的帝国主義と呼ぶことのできる新しい制度をつくり出した。この帝国主義は，法と同意によって維持される国民国家の原則に立つ本国と，法と同意の適用を除外された植民地とのあいだの不平等を前提とするものであったが，ブロカ派人類学は植民地の有色人種を劣等人種とみなす理論的枠組みを提供することで，この制度の不可欠の要素となっていた。

1890 年以降，新しい社会学を築きつつあったデュルケームは，ユダヤ人排斥の人種主義を批判し，人種主義と関連しがちな進化論的方法の社会研究への導入を批判した。かれが構築した社会の概念は，社会に独自の実在性と法則性を与えるものであり，当時の支配的潮流としての人種主義とは無縁なところに社会研究・文化研究の領域をつくりだした。しかし，ナショナリスティックに構

*国立民族学博物館民族文化研究部

Key Words ：Racial Anthropology, 19th Century France, history of anthropology, Broca, Durlheim

キーワード：人種人類学，19世紀フランス，人類学史，ブロカ，デュルケーム

築されたがゆえに社会の統合を重視するその社会学は，社会と人びとを境界づけ，序列化するものとしての人種主義を乗りこえる言説をつくりだすことはできなかった。

人種，国民国家，民族，文化，共同体，性などの諸境界が，人びとの意識のなかに生み出している諸形象の力学を明らかにし，その布置を描きなおしていく可能性を，文化／社会人類学のなかに認めていきたい。

19th Century France saw the development of the Paris Anthropological Society, directed by the world famous anatomist Paul Broca. The anthropology advocated by this society is now defined as racial anthropology, its main objective being to measure the body parts of all races in order to characterize and rank them according to their supposed intellectual ability, inferred from the measurements. This society had a strong influence not only on national/international scientific societies, but on public opinion in the West through these societies. Its success may be explained by the fact that it could furnish a simplified but relatively coherent view of the world and of humanity to the masses who emerged in the 19th century and were not satisfied with the old Biblical world view.

During the French Third Republic that began after the defeat of France by the Prussian army, the society contributed to the construction of a kind of imperialism that might be called Republican Imperialism. This Imperialism implies an absolute inequality between the metropolitan countries, where republican principles such as liberty and equity were applied to all members of the Nation State, and the colonies, where these principles were totally abrogated. In formulating this imperialism, the Paris Anthropological Society played an indispensable role, by offering a scientific basis to legitimize discrimination against colonized/colored peoples, whom it demonstrated to be of inferior race.

In the last decade of the 19th century, Durkheim, the founder of the emerging French sociological school, criticized the application to sociological studies of the evolutionary method that was linked to racial anthropology. Durkheim made every effort to elaborate and consolidate a new sociology. This attempted to establish some constitutive principles of society which could open a new field of social/cultural studies, distinct from that of the racial anthropology which had been dominant through the 19th century. But, in overestimating the integrating mechanisms of a society, Durkheim's sociology did not succeed in elaborating a method that could overcome the racial thinking destined to divide peoples by ranking them.

The cultural/social anthropology that has been shaped more or less under the influence of Durkheimian sociology must be reshaped in order to find a new approach to our world, divided as it is by borderlines such as race/nation/culture.

1　はじめに
2　ブロカと人種主義人類学の形成
3　人種主義人類学と共和主義的帝国主義の誕生
4　デュルケームとナショナリズム社会学の成立
5　結論

1　はじめに

人種の問題は，文化／社会人類学にとって古くて新しい問題である。それが古い問題だというのは，人類学の起源のひとつが人種概念の検討にあったためである。

別のところでくわしく論じたように，19 世紀なかばにロンドンやパリ，ベルリンなどの西欧の主要都市で設立された民族学協会や人類学協会の中心をなしていたのは医師や博物学者であり，それに言語学者や考古学者，奴隷制に反対する人道主義者などが加わることで会は構成されていた[1]（竹沢 2001；Stocking Jr. 1968）。これらの協会の目的は，大航海時代以降の西欧諸国の海外進出と植民地拡張にともなって西欧にもたらされた「他者」情報を分類・整理することにあったが，そのときにモデルになったのは，地球上のすべての人間を肌の色等の外見的特徴によって分類したリンネの試みであった。リンネは人間を，白いヨーロッパ人，赤いアメリカ人，蒼いアジア人，黒いアフリカ人，原始人，畸形人の 6 つに分け，それぞれに固有の気質や文化的特徴を割り当てた[2]。この区分は「畸形人」をのぞいては当時の一般的通念とも重なっていたため，その後もながく影響をおよぼしつづけた。とはいっても，無数の段階と個人差のある肌の色のあいだのどこに人種の境界を引くか，肌の色や頭形，顔面角，鼻の形，身長といった身体的特徴のどれを人種区分の指標とするか，そうして設定された境界は種の違いかそれとも亜種の違いか（両者の違いは交配可能性による），などを決定することは微妙な問題であった[3]。また，長期の観察によってはじめて得られる人びとの気質や文化などの情報を，肌の色などの身体的特徴に対応させていくこともまた厄介な問題であった。これらの問題を「解決」するためにこそ，最初期の人類学協会や民族学協会は設置されたのである。

人類学の歴史を教科書風にたどるとすれば，人類学は人種概念の検討とともにはじまり，エミール・デュルケームによる「社会」概念とフランツ・ボアズによる「文化」概念の明確化と，その人類科学への適用によって決定的革新がもたらされたというこ

とになるだろう。ともに共和主義的な精神をもつユダヤ人であったふたりは，人種の名による特定の集団に対する差別を批判し，その背景にある進化論的認識の人類学への安易な適用を強く戒めた。かれら以前の人類学が，普遍的／単一的／決定論的なものとしての人種概念にもとづきながら，進化の階梯に沿って人間諸集団を序列づけることを目的視していたのに対し，かれらは相対的／複数的／構築主義的な社会および文化の概念を対置することで，それぞれ社会人類学と文化人類学と呼ばれることになる新しい学問領域を切り開いた（竹沢 2003；竹沢　印刷中）。そしてつぎの世代の研究者たちは，かれらによる人種概念の追放を享受し，少数の例外をのぞいてそれに戻ってくることはなかった。そのなかで，ベネディクトは文化人類学の視点から，人種概念は科学的だが人種主義[4] は非科学的だとし，リュフィエは生物学／遺伝学の立場から，人種概念そのものの非科学性を明らかにしている（ベネディクト 1997；リュフィエ 1986）。このように人類学において人種概念は徹底的に批判され，あるいは追放されてきたが，非科学的であることが明らかである人種概念が今日もなお人びとを動かしつづけているのはなぜかを研究することは，その批判ほどには手がけられてこなかったのである。

一方，人種をめぐる問題が文化／社会人類学にとって今日的な問題であるというのは，以下の理由による。第 1 に，人種概念とそれにもとづく差別に対してさまざまな批判が重ねられ，明確な政治的措置がとられてきたにもかかわらず，人種の名による差別と排除があいかわらず存続していることである。1789 年のフランス革命はあらゆる人間の平等を説く「人権宣言」を公布し，それに沿って奴隷制の廃止を宣告したし，奴隷制の廃止をめぐる人道主義者の活動は，イギリスにおいてもフランスにおいても初期の人類学組織である民族学協会を生み出した[5]（竹沢 2001；Stocking Jr. 1987）。一方，政治的次元においても，国連はナチス・ドイツによるホロコーストの記憶が生々しかった 1948 年に「人権宣言」を採択して，人種，皮膚の色，性などによる差別を禁止した。つづいて 1965 年には，ドイツにおけるネオ・ナチズムの運動の激化に対抗すべく，「あらゆる種類の人種差別の撤廃に関する国際条約」を採択し，この条約の締約国が人種や肌の色による差別を禁止するだけでなく，それを処罰する法を制定することを求めた[6]。

しかしながら，これらの措置がとられたにもかかわらず，人種の名による差別や抑圧は今日もなお多くの国でおこなわれており，なかでも旧ユーゴやスーダン，ルワンダなどで，特定の人種と民族の存在そのものを否定するような「民族浄化」の試みがおこなわれたことは，いまだ私たちの記憶に新しい（岩田 1999；武内 2003）。社会／

文化人類学が人間の社会と文化を個別的かつ総体的に理解することを志向する学問であるとすれば，こうした人種の名による差別や抑圧が生じるメカニズムを明らかにし，それを抑制させるための方法を考えていくことも，この学に課せられた課題のひとつであろう。

第 2 に，このことと関連するのだが，人種の概念と，文化や社会，民族といった文化／社会人類学の基礎概念とがますます重層化しつつあることである。こうした傾向はとりわけ国内法で人種差別を禁じている西欧諸国に顕著であり，フランスの哲学者／社会学者であるバリバールはこれを「人種なき人種主義」ないし「文化主義的レイシズム」と呼んでいる（バリバール／ウォーラーステイン 1997）。かれによれば，今日の西欧諸国では，新右翼による中東系，アフリカ系の人びとに対する差別と排撃が日常化しているが，そうした野蛮な振る舞いの根拠とされているのは，19–20 世紀前半のような生物学に根ざすとされる非白人の知的・人格的劣等性ではない。むしろ新右翼は，主流文化に対するかれらの文化の異質性を標的とし，その文化はかれらのうちに実体化されているがゆえに変更不可能だとして，かれらに対する排撃や排除を正当化しているのである。ここにみられるのは，生物学的決定論の文化的決定論への読み替えであり，文化の差異を生得的で決定論的なものとしつつ，それを理由にある種の人間集団を排除／差別しようとする新たなタイプの人種主義である。

フランスの新右翼の指導者であるルペンが文化／社会人類学の文化相対主義に多くを学び，それを排他的言説の補強材料としていることはよく知られている（フィンケルクロート 1988）。もちろん文化相対主義がこうした言説や行動を招いたわけではないが，それに安易に利用されるほどナイーブであったことは認めるべきであろう。この種の人種主義を「文化主義的レイシズム」と呼ぶことの妥当性の判断はさておき，文化／社会人類学が人種の問題を回避しているかぎり，その基本語彙である文化や民族などの語が人種主義者に流用される状況に対抗することはできないのではないか。

第 3 に，文化や民族の語を取り込んだ人種主義が政治のなかで前景化していることである。これについてはアメリカ合衆国の例をとりあげよう。アメリカ先住民やアフリカ系アメリカ人など，合衆国内の文化的少数派が就職その他で差別され，平均収入も他に比べて少ないことは長く社会問題となっていた。これを改善すべく，1964 年に一部改正された公民権法によりアファーマティブ・アクションと呼ばれる措置がとられ，文化的少数者は大学入試や公務員の採用などにおいて人口比率に沿った是正措置が得られることとなった。しかしながら，これらの措置を発動させるには，まず対象となるメンバーを限定しなくてはならない。このとき，これにもちいられたのが国

勢調査の指標である，ヨーロッパ系，アフリカ系，アジア系，ヒスパニック，先住民の区分であった。この区分は，容易にみてとれるように人種区分とほぼ同じであり，社会的格差の是正という善意のもとでなされたアファーマティブ・アクションやそれを要素としてもつ多文化主義が，皮肉なことに人種区分を再生産し，強化するのに利用されてきたのである（ホリンガー 2002）。

この措置の過ちは，社会的格差是正のために採用した優遇政策を，対象者の個々の社会的属性ではなく，出自によって自動的／決定論的に割り振るというまさしく人種主義的ラインに沿っておこなった点にあった[7)]。その結果，複数の文化集団の共存をめざす政策であったアファーマティブ・アクションや多文化主義は，人種の線に沿った差異を際立たせ，対立を激化させるだけに終わったのであり，こうした失敗は多文化主義を採用したオーストラリアなどにおいても指摘されている（ハージ 2003）。さらに，ここにおける文化／社会人類学にとっての問題は，これらの議論を主導したのが政治研究や政治思想の研究者であり，「文化の科学」であるはずの文化／社会人類学は討論の場に招待さえされていなかったという事実である[8)]。文化／社会人類学は，これまであまりに安易に自己を「異文化研究」の学として規定してきたのではないか。その結果，自国内部の文化間の葛藤をどう調整していくか，それを近代の諸社会の根底にある国民国家の原則とどう整合させていくか，が課題として焦点化されたとき，この学は不名誉な非関与の姿勢をとることを余儀なくされてきたのではないか。

以上にみてきたように，文化／社会人類学にとって人種の問題がたんなる過去の問題ではなく，アクチュアリティをもつ問題であるとすれば，この課題に対するどのようなとり組みが可能なのか。容易に考えられるのは，人種の概念が社会の諸局面でどのように焦点化され，ある種の人びとにどのような不利な状況を生じさせているかを，フィールド調査によりながら明らかにしていくことであろう。たしかにそれは重要な試みであるが，今の私にはその準備はできていない。私が本稿においてめざすのは，近代フランスにおける人種主義的学説の形成と発展をたどることで，そこから逆向きにその解体の可能性を探っていくことである。その目的に沿って，ここではポール・ブロカとエミール・デュルケームというふたりの卓越した研究者の業績を中心に考えていきたい。

ブロカは1824年に生まれ，解剖学や病理学の分野で多大な貢献をなした医学者である。大脳半球の機能分化や言語中枢を発見した研究者として医学史に名を残すほか，パリ人類学協会やパリ人類学学校を設立して，人種主義的な人類学を広めるのに大きく寄与した。一方，デュルケームは 1857 年に生まれており，ブロカとはおよそ一世

代の年齢差がある。デュルケームも 1898 年に『社会学年報』誌を創刊して，独自の方法と独自の研究対象をもつ社会学をフランスに築きあげている。政治的にはふたりとも熱烈な共和主義者であったが，人種に関しては，前者が人種主義的教説の推進者であったのに対し，後者は反ユダヤ主義が跋扈した 19 世紀末のドレフュース事件では反ユダヤ主義を批判し，社会学や人類学に進化論を導入することに強い警戒心を示すなど，人種主義に対して批判的な姿勢をつらぬいた。このように，政治的には共通の傾向をもち，それぞれ人類学と社会学の一学派の創始者として高い権威を築きえたふたりが，こと人種主義にかんするかぎりまったく対照的なポジションをとっていたのはなぜか。そこにあるいは人種主義を脱構築する手がかりをみつけることができるのではないか。これが私の現時点での見通しである。

このふたりをとりあげることで，本稿が一定の答えを出したいのは以下の問いである。

1. 19 世紀なかばに発展した人種主義は，いかなる固有の特徴をもっていたか。ブロカはこの時代に人種主義的な人類学を築きあげたが，人種主義の歴史をたどったポリアコフやローレンらが明らかにしたように，かれの前にも人種主義は存在したし，それにもとづく特定の集団に対する差別や排除はおこなわれていた（ポリアコフ 1985；ローレン 1995）。こうした古くから存在した人種主義に対し，医学者・解剖学者でもあったブロカが，他の言語学者や社会科学者らとともに人類学協会に依りながら作りあげた人種主義はいかなる特徴をもつものであったか。同様に，ブロカの推進した人種主義を核としたその人類学は，いかなる学問的固有性と社会的影響をもつものであったか。

2. 人種主義はいかなる制度と相関することで，みずからを確立し，強固なものとしてきたか。先にもみたように，今日の科学的見地からすれば，人種主義を支えているのは臆説や偏見にすぎず，またフランス革命において万人の平等を説く人権宣言が出されていらい，さまざまな批判にさらされたものであった。とすれば，そうした科学的根拠を欠き，多くの批判を浴びてきた人種主義がこれほどまでに存続してきたのには，なんらかの外在的理由があったと考えるべきであろう。ここでは人種主義と，19 世紀後半ヨーロッパの一大特徴である国民国家／植民地拡張＝帝国主義との関係を考えることで，この問いに対して一定の答えを出していきたい。

3. 人種主義を解体していくための手がかりを，どこに求めることができるか。人種主義がある種の人びとに不当な差別をもたらしているかぎり，その客観的な研究は不可能であり，その解体ないし弱体化の手がかりを求めていくことは不可欠である。

ここにおいて，ブロカの人類学は人種主義の理論化に寄与した一方で，デュルケームの社会学はそれへの批判を核に据えていた。この両者を通観することで，人種主義の解体に向かう手がかりを得ることはできないか。また，このふたつの科学を系譜上の参照点とする文化／社会人類学が，人種主義に対抗するための手掛かりをそこから引き出すことはできないか。

本稿が論じていくのはこの 3 つの問いであり，それぞれ以下の 3 つの章の中心的テーマとなるはずである。

2　ブロカと人種主義人類学の形成

ポール・ブロカは 1824 年，フランス南西部ガスコーニュ地方の小さな町に，熱心なカルヴィン派の家系の医師の息子として生を受けた[9]。幼年期にはナポレオンの創設したエリート校である理工科学校に進学して，エンジニアになることを夢見ていたようである。しかし，幼少期に姉を病で失ったことを契機として家業の医学を修めることを選択し，17 歳のときにパリに出てパリ大学医学部に入学する。いくつかの病院でインターンをしながら学業をつづけたかれは，1850 年には癌に関する研究論文で優等賞を獲得するなど，その能力を十分に開花させていった。1849 年には修士号，1853 年には教授資格を取得するなど，ブロカは順調に医師としてのキャリアを積み上げ，さらには当時の風潮であった裕福な個人の患者をとることで，安定した生活を築き上げた[10]（図 1）。まさに中産階級の立身出世を地で行ったかれであったが，1848 年 2 月の革命に市民病院の外科医として立ち会った際には，心のなかの共和主義精神を燃えあがらせている。

地方の医師として保守的な心性をもっていた両親にあてた手紙のなかで，ブロカは革命の現場に立ち会いながら，つぎのように書いている。

> 共和国。私はそれをしばしば夢見たものでしたが，わずか 24 時間のうちにそれがつくり出され，成長し，私が望んでいた以上に気高く，力強くなるのをみてきました。何日ものあいだ，私は恐れ，苦い失望とともに涙を流しました。…この運動はどこで止まるのでしょうか。子どものときから抑圧され，結託した資本家たちに永遠に搾取されてきたこれらの勇敢な人びとは，とつぜん巨大な都市の支配者になったのです。かれらはその武器を置くほど気高く，もういちど労働の王国を築くのでしょうか。教育を受けた私たちにはおそらく不可能な自己放棄，いかなる王もこれまで示したことのない自己放棄，その例がここでは民衆によって示されているのです。高貴な，高貴な民衆。労働においても，バリケードの上以上に勇敢な人びと（50）。

図 1　50 歳の頃のブロカ（Schiller 1979: 214）

しかし，ブロカの，そして民衆の高揚もつかの間，大ブルジョワジーの資金提供を受けた傭兵を中心とする軍隊によって革命軍は打ち破られ，かれの勤務する市民病院は負傷した市民であふれるようになる。

> 市民病院はいっぱいです。500 人が負傷し，100 人以上が亡くなりました。病室を空けて，軽傷者を慈善病院に移さなくてはなりません。病室がないのです。軽傷者用の施設を玄関ホールに設けなくてはなりません。…私の試験など糞くらえです。私の患者たちをどうして見捨てることができるでしょう。私の義務と私のここでの地位を考慮しないとしても，私にはそんなことはできなかったのです。パリは終わりです。反乱はもはや不可能で，兵士はもう残されていません。反乱者たちはみな，死んだか，負傷したか，牢獄に入れられました。…薄汚い連中が，牢獄から解放された犯罪者や密告者に金をばらまいています。ロシア，イギリス，王党派，とりわけルイ・ナポレオンが，何百万という金をパリにばらまいて，この国の革命の歴史に例をみないおぞましい戦いに巻き込んでいるのです（55–56）。

市民を主体とした革命を力で押さえつけた大ブルジョワジーが，ナポレオンの甥の

ボナパルトを皇帝として迎え入れる 1851 年になると，ブロカは政治について語るのをやめる。外科と解剖学と病理学の研究，とりわけ解剖と文献渉猟と試験の準備へと，かれは沈潜していく。かれの研究の対象は，細胞の機能の解明から，癌やくる病，動脈瘤への処方，そして軟骨の組成の研究と関節炎の治療まで，年ごとに広がりをみせていく。のちにかれの名声を世界中に高める大脳の機能分化の研究はいまだ着手されていなかったが，教授資格を取得してパリ大学の助教授になる 1853 年までに，ブロカの名は国外にまで知られるようになっていたのである（120）。

外科と解剖学の研究に邁進していたはずのブロカが，なぜ人間の総体的科学としての人類学に関心をもつようになり，人類学協会や人類学学校の設立に動いたか。そこにはいくつかの伏線と，ひとつの契機があった。かれの生まれたドルドーニュ地方は，洞窟画で知られるラスコーやクロマニヨン人の発見で有名な土地であり，ブロカは幼少期から化石の採集をおこなっていた。また，1847 年にはパリ右岸のベネディクト派の墓地での人骨発掘に参加していたし，友人の農場を訪れたときにはノウサギとイエウサギの混種に驚くという経験をもっていた。ここでの経験をもとに雑種についての研究を重ねたブロカは，その成果を 1858 年にパリ生物学協会で発表する。しかし，環境との相互作用のなかでの種の進化を説くラマルク説に立つその発表は，当時のフランスの学界で支配的だったキュヴィエの反進化思想と相容れないことを理由に，議長によって中断させられてしまう[11]（萬年・岩田 1992: 24）。生物学会の古色蒼然とした雰囲気に憤ったかれは，闊達さをもたない専門分化した解剖学会や生物学会をのりこえるべく，新たな協会の設立に走ったのである。

1858 年にブロカはパリ人類学協会を設立すべく，18 人の発起メンバーをもって教育省に掛けあうにいたる。しかし，人間を唯物論的に研究しようというその会の趣旨が，貴族やキリスト教会，大ブルジョワジーに基礎をおく保守的な第二帝政のフランスで受け入れられるはずはなかった。ブロカのオーガナイザーとしての能力が発揮されたのはここにおいてであり，新会員を補充し，有力者の後ろ盾を得たこの会は，「政治，宗教，社会，政策については発言しない」「研究集会には警官が立ち会う」という 2 つの条件をつけられた上で，1859 年に教育省の承認をとりつけることに成功する（133–135）[12]。ここに，人類学を冠する協会が世界ではじめて設置されたのである。

このようにして成立したパリ人類学協会は，いかなる特徴をもつものであったか。機関誌の扉に印刷された協会規約の第 1 条は，「パリ人類学協会は，諸人種の科学的研究を目的とする」と，人種研究を中心に据えることを明記する。さらに，6 年後の 1865 年の論文では，その目的はより具体化されている。

これらの多様で限りのない探求は，動物学と解剖学，心理学，衛生学，民族学，考古学，言語学，先史学の協働を必要としている。それはとうとう，人間の科学ないし人類学を構成するというひとつの目標に向かって収斂しつつあるのである（Broca 1865: ix）。

解剖学や動物学，博物学を核として，それに言語学や民族学，考古学，心理学，衛生学などの諸学を結集させることで，人間についての総合科学としての人類学を築くというのである。今日の私たちからみれば，自然科学の旗印のもとに，言語学や心理学，民族学などの人文社会諸科学を統合しようとするその姿勢は奇異なものに思えるかもしれない。しかしながら，自然科学が急速な発展をみたこの時代，自然科学の主導のもとで諸科学を再編しようとすることは，「実証科学」としての社会学を，数学や天文学，物理学，化学，生物学などの自然科学のつぎにおいたコントの例を引くまでもなく，きわめて自然な試みであった。とりわけこの会の目的が，人種という人間の生得的条件についての研究にあった以上，それは強く望まれていたものであった。ブロカの率いたこの人類学協会が広く名声を浴びていたことは，それを模してロンドン（1861 年）やマドリッド（1865 年），モスクワ（1866 年），ベルリン（1870 年）にあいついで人類学協会が設立されたことが如実に物語っている。とりわけロンドンの協会は，設立後10年もしないうちに1,000人を超える会員をあつめ，「科学的団体としては英国に並ぶものがない」といわれるほどの人気を博していた（Stoking Jr. 1971: 377）。その創始者であるハントは，ブロカの教説を忠実に受け入れ，その恩恵を公言するほど，パリ人類学協会の影響は大だったのである[13)]。

ブロカの創始した人類学協会の活動はどこに向かっていたか。1860 年から毎年 1 冊ずつ出されていたこの協会の機関誌をひもとくと，考古学的な遺物の研究や言語の分類，そしてセネガルからエチオピア，タヒチ，ペルーにいたる「民族学的研究」など，多様な研究がなされていたことがわかる。しかし，その中心にあったのは，さまざまな集団の脳の容積の測定や身体計測，人種間の結婚の可能性とその影響，人種差と知能差の相関など，人種をめぐる諸問題の研究であった。たとえば，第 1 巻におさめられた「セネガルの民族学的研究」と題された論文をみると，その報告者はセネガル駐留のフランス海軍軍医であり，現地の人びとの慣習や言語についての若干の記述はあっても，大部分は身体の計測や頭形の特徴の記述である（Benoït 1860）。のちにある人類学史家は，ブロカ派の活動を人類学ではなく「人種学」と形容したが（Mucchielli 1997），それはそう呼ばれるに値するものだったのである。

ブロカの人種主義人類学は，いかなる特徴をもつものであったか。それは第 1 に，人間がひとつの起源をもつのではなく，複数の起源からなるとする「複数起源説」に

立つものであった。ブロカによれば，白人とその他の人種とのあいだに多大な身体的／知的差異があることは明らかであり，とすればそれらが起源をひとつにすると考えることは不自然であり，複数の起源を考えたほうが説明は容易である（Broca 1870）。この観点からブロカ派の人びとは，複数の人種のあいだでの結婚は出生率その他にいかなる影響をおよぼすか，その子孫は生殖能力や身体的強壮さを保ちつづけるか，などの研究に邁進した[14]。今から振り返れば滑稽としかいいようのない研究関心であるが，ブロカの時代には高等猿類は人間のカテゴリーに入るか否かという議論が真剣におこなわれるなど（Curtin 1973-2: 368），人間を含む種の境界はあいまいなままであったことを想起すべきだろう。実際，高名な生物学者であるハックスレーでさえ，「異なる人種の頭蓋骨の容量の差異は，最下等の人間と最高等の猿との差異より大きい」と断言してはばからなかったのである（Stocking Jr. 1987: 148）。

もっとも，ブロカを複数起源説に駆り立てていたのは，人間のあいだの形質的な違いであると同時に，地球上のすべての種が神の手で一元的に創造されたという聖書の世界観に対する反発であった。19 世紀を通じてフランスでは，1789 年の大革命にはじまる共和主義と，キリスト教会と王制にすべてを基礎づけようとする保守主義とが，政界，産業界，軍隊，学界／思想界など，社会のあらゆる次元で対立していた。このとき，リーダーのブロカをはじめとして，共和主義を強く信奉していたこの派の人びとは，人類学を「社会的戦いの武器」として位置づけることで，キリスト教的世界観にはげしい戦いを挑んでいた[15]。保守的イデオロギーの根幹にある神の一元的創造説に対抗する言説をつくり出すことは，かれらがなにより求めていたことであったし，まさにその点にこそこの学派の求心力は存在していたのである（Hammond 1980）。

ブロカの人種主義の第 2 の特徴は，白人と有色人種とのあいだの身体的差異をそのまま知的および文化的差異へと敷衍させると同時に，それを「実証」すべく，さまざまな道具や実験を考案することで差異を数値化し，可視化したことであった。たいへん器用であったブロカは多くの計測機器を発明しており（図 2），そのことがかれの研究に自然科学の堅実さの印象を付与しただけでなく，人種差別のイデオロギーでしかないかれの人類学に「科学的真理」の外観をまとわせるのに貢献した。人種間の差異の表徴としてブロカが重視したのは，頭示数（頭蓋骨の縦の長さを横幅で割ったもの）であり，顔面角であり，そしてなにより頭蓋の容積の計測であった[16]。それによってかれは人種間の差異と脳の重量の差異を等価視し，さらに知性の優劣へと結びつけたのである。

人種においても諸個人においても，知的能力の違いは脳の重量ともっとも関係する原因のひとつである。いいかえるなら，他の点で同じであるなら，知性の発展と脳の重量のあいだには顕著な関係がある。

私は脳の重量と頭蓋骨の容積についてできるだけ多くの観察を集めたが，さまざまな著者がさまざまな方法で著したこれらの資料から，以下の結論が導き出された。脳の重量は，老人より成人，女性より男性，一般人より優れた人間，劣等人種より優等人種において上回っていること。理論的予見はかくして証明されたのである[17]（Broca 1861: 187–188, 304）。

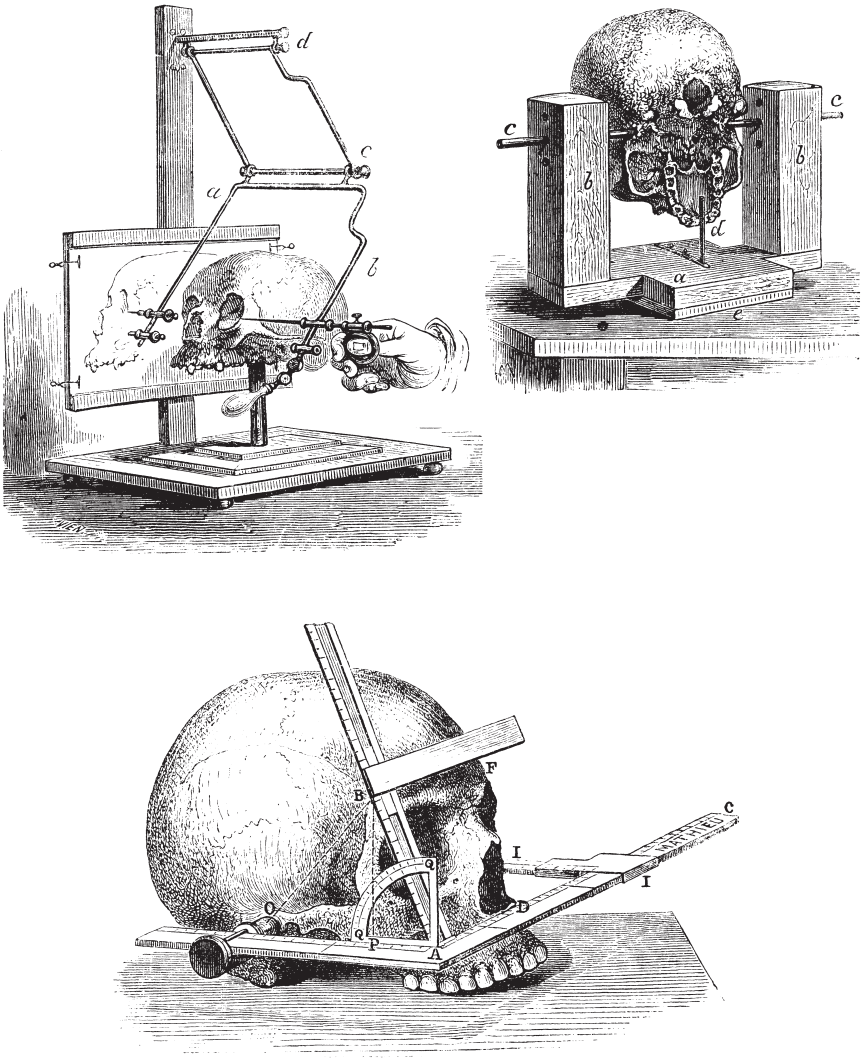

図 2　たいへん器用であったブロカは，人間の身体の各部位を計測するための機器を発明した（*Memoire des la SAP* 1-3: 125, 2-2: 83,）。

ブロカの人類学の第 3 の特徴は，ヨーロッパ人のあいだに複数の「人種」ないし「タイプ」を想定し，それをもとに国民形成の歴史を再構成しようとした点である。ブロカは協会の『年報』の創刊号に「フランスの民族学的研究」を発表し，その後もくり返しこの問題に戻っている。かれによれば，今日のフランス人を構成するのは，短躯，短頭，褐色の髪，低い鼻などの特徴をもつケルト人と，長躯，長頭，ブロンド，高い鼻のキムリス人（のちに北方人ないしアーリア人と呼ばれるようになる），そしてアキテーヌ人，地中海人の 4 タイプである。これらのタイプは身体的特徴によって区別されるほか，それぞれフランスの北西，北東，南西，南／南東を中心に分布しており，その血が混ざることによって今日のフランス人が形成されたとする（Broca 1860–63）。ブロカは頭蓋骨の計測を中心に，身体の計測や髪の色その他の身体的特徴，言語および方言，シーザーの『ガリア戦記』などの歴史資料を組み合わせることで，4 つの人種がどのように交錯したかを地図の上に落とし，それをもとにフランス国民形成の歴史を再構成しようとしたのである。

こうした国民形成史の試みは，ブロカの独創ではなく，1837年にパリ民族学協会を設立したウィリアム・エドワールらがすでに試みていたものであった（Edwards 1841: 39sq.）。しかしブロカは，生涯を通じて集めた 1 万を超える頭蓋骨の分析や，徴兵検査を通じてフランス全土でおこなわれた身体計測によって（渡辺 2003: 268），それに堅固な立論を与えようとした。また，ブロカにとってヨーロッパ内の人種間の混交は自明のものであり，かれは血の純粋さをいたずらに称揚することも，ヨーロッパ諸人種のあいだに知的／文化的優劣をつけることもなかった[18]。しかし，全人類を諸人種に微分化し，それぞれに固有の身体的・倫理的特徴を与えていくこうした研究は，のちにプロシアとの戦いが始まってフランス全土でナショナリズムが進行したときには，ヨーロッパの人種間の優劣を正当化する議論として流用されていく。たとえば，ブロカ派のひとりであるキャトルファージュは，プロシア人はゲルマン人やフランス人の主流を占めるアーリア人ではなく，先住民族としてのフィン人の子孫であり，「かれらの暗い恨み，高度な文明に対する半蛮人の嫉妬深い憎悪」が，フランスに対する野蛮な攻撃を仕掛けたとした（Quatrefages 1871: 688）。ブロカのもとから育ったラプージュが，ナチスによってドイツ民族の優越とユダヤ人排除を正当化する目的で利用されることになる『アーリア人，その社会的役割』を 1899 年に書いたのも[19]，こうした方向性に沿ったものであった。

ブロカの人種主義人類学のもっとも著しい特徴が，つぎのような決定論ないし還元論の徹底にあったことは疑いない。人間の諸集団は多様な身体的特徴と言語に代表さ

れる文化的差異を有しているが，それはいくつかの数値に還元することができる。身体の各部位の計測を通じて得られるこれらの数値は，人間の文化と行動様式を一貫したかたちで理解するための鍵である。一見したところ人間諸集団は多様で相対的にみえるが，厳密な計測をおこなったなら，それらは数値によっていくつかの群に分類されるだけでなく，野蛮から文明へといくつかの段階をたどってその発展をあとづけることができる。そしてこの数値がとりわけ有色人種と白人とのあいだで大きな偏差を示しているからには，人間にひとつの起源ではなく，複数の起源を割り当てるべきである。

人間を一連の数字にまで還元することで，人種間の差異と優劣を可視化／絶対化し，さらにはそれを数値のかたちで序列化しようとしたブロカらの試みは，ヨーロッパにおける人種主義の新たな段階をしるすものとなった。たしかに，それまでにも人種主義は，海外でのヨーロッパ支配地の拡大や奴隷制の拡張などを通じて，ヨーロッパ人のあいだで涵養されていた。しかし，それは肌の色や髪の毛などの外見的特徴以外に根拠をもたないものであったがゆえに，直感としかいいようのないあいまいなものにとどまっていた（注 3 参照）。しかも，すべての人間の平等を説いたフランス革命時の人権宣言いらい，人種主義に対する批判や，人種主義を前提にする奴隷制に対する批判は高まっていたのである[20]。

このとき，ブロカらが制度化した人種主義人類学は，大仰な実験室や洗練された計測機器によって囲いこまれ，解剖学や統計学，考古学，民族学といった新興の科学に基礎づけられることで，「科学的言説」であるかのような外見をもつことができた。しかもそれは，頭蓋の容積や身体の計測といった序列化しやすい数字に還元されていたがゆえに，人種のあいだの格差を明瞭に視覚化かつ固定化することができたし，知的能力から文化的優劣にいたる差別的なイデオロギーを支える土台となることができた[21]。人間間の差異を序列化し，固定化するために諸科学が活用・動員されたのは人類史上はじめてであり，それは人種主義的言説の普及と一般化に決定的に寄与した[22]。のちに，近代的な営為としての人種主義のイデオロギーに立つナチスの反ユダヤ主義の実践が生み出されたのは，こうした基盤の上においてだったのである（表 1）。

と同時に，このブロカの人類学が，人間の起源に複数の種をおくことで，神による人間と世界の一元的創造というキリスト教的世界観／人間観に対する挑戦であったことを忘れるべきではないだろう。キリスト教の教義とそれに支えられた保守主義に対する批判意識は，ブロカ派のメンバーのほとんどに共有されたものであった。たとえば，この派の一員であり，のちに共和派の代議士になる言語人類学者のオヴェラック

表 1　ブロカ派人類学の発展と普及

1855	自然史博物館に人類学講座（Quatrefages が就任）
1859	パリ人類学協会設立
1866	第 1 回国際人類学会開催
1868	高等実践研究院に人類学研究室設置
1872	『人類学雑誌』創刊
1876	パリ人類学学校設立
1878	トロカデロ民族誌博物館（Hamy が学芸員に）

は，かれらの人類学が保守派／守旧派に対するイデオロギー的武器であることをつぎのように明言していた。人類学は，「わが文明のなかに残りつづけている野蛮で未開なものを理解させる。それは，教権主義であり，神の信仰，軍国主義，貧者と弱者の抑圧であり，女性の地位の低さ，権威主義，官僚主義，自由主義，社会的不平等である。これらの残存から私たちが解放されるために，人類諸科学の発展が求められているのである」（Hammond 1980: 126 に引用）。このようにブロカからの人類学がキリスト教的世界観／人間観に対する公然たる挑戦と改革であったとすれば，それはたんなる一科学であることはできなかったはずである。医師／解剖学者であったブロカが，隣接諸科学の研究者と協力して，総合科学であると同時に統一的な世界観／人間観を構想するための学としての人類学を志向したのは，そうした理由によるものであろう。

理論的単純化と還元論，そして共和主義的な反キリスト教イデオロギー。19 世紀後半のフランスで絶大な影響力をもったブロカ派人類学の功績は，それらの点に尽きるのだろうか。たしかにブロカの人類学がそれらの特徴をもっていたのは事実だが，それのみを強調するのは学派の評価としてはあまりに偏っていよう。のちにブロカが国際的な名声をほしいままにする大脳半球の機能分化や大脳局所説が最初に発表・議論されたのは，かれのつくったパリ人類学協会においてであったし，考古学や先史学，言語学，民族学までを包括するその活動は，フランスにおける人文諸科学の発展にも大きな貢献をはたした。たとえば協会は，イギリスで発見された打製石器をいち早くフランスに紹介し，多くの市民に供覧させることで，人間の歴史が聖書に記されたより古いに違いないことを示した。また，1858 年にブロカの生家の近くでクロマニヨン人の骨格が発見されたときに，パリで最初にその報告会を開催したのも，ドイツで 1856 年に発見されていたネアンデルタール人の頭蓋との比較をおこなったのも，やはりこの協会であった（Schiller 1985: 154sq.）。イギリスでラボックが旧石器と新石器の区別を提唱するなどして，人類の歴史の再構成と考古学の発展に寄与したのが 1865 年であったことを考えるなら，この領域での人類学協会の進取性・先見性は評

価されてしかるべきであろう[23)]。

ブロカの経歴に戻ることにしよう。人類学協会が予想以上の成功を収めたのをみたかれは，新興の学としての人類学を確固たるものとするべく，やつぎばやに新しいプロジェクトを実現させていく。1866 年にはパリで第 1 回の国際人類学会を開催し，1868 年には大学の卒業生クラスを対象とする高等実践学校に人類学講座をもうけることで，ブロカ派人類学の再生産体制をつくりあげる。1872 年には人類学をさらに広範に普及させるべく，人類学協会以外のメンバーにも門戸を開いた研究誌『人類学雑誌』の刊行を開始した。また，1878 年のパリ万国博覧会に際しては全面的に協力した結果，その終了後に施設を再利用してトロカデロ民族誌博物館が開設されたとき，ブロカ派の一員であるエルネスト・アミー（Ernest Hamy）を学芸員として送り込むことに成功した（竹沢 2001）。かくしてブロカ派人類学は，アカデミズムのなかでも，あるいは公衆向けの施設においても，確固たる地位を作りあげていったのである。

これらのプロジェクトのなかでも，ブロカ派の名声をフランスの学界／知識界に印象づけたのは，なにより 1876 年につくられたパリ人類学学校であった。教育省やパリ市，ロスチャイルド家などの資金援助によってつくられたこの学校は，フランス政府の公的な教育システムからは切り離された，卒業証書も出さない自由聴講の学校であった。この学校の運営にはブロカ派の総員が動員されており，ここで講義をおこなったのはパリ大学医学部の教授になっていたブロカをはじめ，生物学のポール・トゥピナール，先史学のガブリエル・ド・モルチエ，言語人類学のアベル・オヴェラック，民族学のウジェーヌ・ダリー，統計学のアドルフ・ベルチヨン，医学地理学のポルティエなど，それぞれが何冊もの本を書いている有能な壮年・若手の研究者であった（Dias 1991: 68）。この学校がこれだけの人材を集め，しかも当時の「最先端」の学説を展開させていたとすれば，聴講者が列をなしてつめかけたというのも誇張ではなかっただろう。実際，聴講者は年を追ってふえ，その数は 1877 年の 8,384 が，1884 年の 9,019，1889 年の 11,697 と増加の一途をたどっていた（Dias 1991: 69）[24)]。その一方で，この学校に対する教会派／王党派の攻撃は激しく，学校の開設に対して強く反対したばかりか，カトリック系の新聞を通じて激しいキャンペーンをおこなっていたが（Kremer-Marietti 1984: 402），それさえもこの学校の名声を裏づけるものであったといえるかもしれない。

ブロカのこの学校は，なぜこれほどの成功を収めることができたか。その第 1 の理由は，その講義内容の斬新さと包括性に求められるべきである。この学校の講義内容は，医学／解剖学に基礎づけられながら，先史学，言語学，民族学，統計学までを総

図 3　ブランコに乗りながら講義をするブロカを揶揄した絵。ダーウィンを批判しながらも進化論を説いたブロカとその人類学派は，キリスト教会の激しい批判を浴びた（Schiller 1979: 283）。

合的に教授することで，キリスト教の世界観／人間観に代わる統一的な世界観／人間観を市民に伝えようとするものであった。先にも述べたように，ブロカの時代にはネアンデルタール人やクロマニヨン人の骨が発見されていたし，世界各地の猿類が調査・収集され，その頭蓋や骨格が比較解剖されていた。さらに，国際的な名声を誇ったブロカのもとには，フランス海軍その他を通じて世界中から頭蓋骨が集められ，その数は 1 万点を超えていた。パリの人類学学校で教えられたのは，これらの具体的な事物を通じての，猿類から古人類，さらに現存の人間にいたる進化論的な人類の歩みの再構成であり（図 3），そして世界中の民族の慣習と社会組織の比較を通じての，

西ヨーロッパ文明の優越の「証明」であった[25]。かくしてそれは，神の手による万物の創造というキリスト教的歴史認識／世界認識に代替しうる，統一的で首尾一貫した歴史認識／世界認識をつくりだすと同時に，万物の頂点に人間とりわけ西ヨーロッパ人をおく，ナルシスティックな自己像／人間像を提供していたのである[26]。

他方，この学校の成功の理由は，受講者の期待のうちにも求められるであろう。市民革命や産業革命が人びとの生の経験を大きく変えていたこの時代，人びとは旧来の社会的枠組みとしての共同体から析出され，キリスト教会への帰属意識も大きく揺らいでいた。人びとは急速な産業構造の変化とともに農村から都市へと移り住み，それまで経験したことのない生活と意識の変革を身をもって味わっていた[27]。そうしたかれらを取り込むために労働組合やクラブ，政党などがあいついで設立されたが，そのいずれにも帰属意識をもたない人びとを形容するべく，「群衆」ということばが作りだされたのもこの時代であった。その名を冠した最初の著作である『群衆心理』のなかで，ギュスターヴ・ルボンはつぎのように断言する。

> 現代こそは，人間の思想がまさに変化しつつある危機のひとつをなしている。このような変化の根底には，二つの根本的な要因が存する。第一の要因は，文明のあらゆる要素が由来する宗教上，社会上の信念の破壊ということである。第二の要因は，科学上，産業上の近代の発展によって生じた，全く新たな生活状態，思想状態の創始ということである。…幾分混沌としたこのような時代から，将来どのようなものが現れてくるかを，さしあたって予言するのは容易ではない。現在の社会についで来るべき社会は，どんな根本的思想の上に築かれるであろうか？それは，まだわからない。しかし，今日から予想しうることは，将来の社会が，その成立に際して，近代の最高主権者である新たな勢力，すなわち群集の勢力を重視せねばならぬであろうということである（ルボン 1993: 14–15）。

旧来の社会的枠組みや価値体系から切り離され，社会をいわば浮浪する群衆の力に最初の注目したルボンが人類学学校の修了生であり，そこにいくつかの論文を寄稿していたという事実は[28]，この学校の教育内容の斬新さと旧知にとらわれない闊達さを証拠立てるものであろう。それは資格も卒業証書も出さない学校であったがゆえに，聴講者の関心をいちはやく読み取り，かれらに訴えることばと概念を練り上げることが求められていたのであった。ところでルボンは，「群集はたんに破壊力しかもっていない。群衆が支配するときには，必ず混乱の相を呈する」（ルボン 1993: 19），とその秩序破壊的な側面に注目したが，産業革命と政治革命によって生み出された群衆とは，一面において貪欲なまでの知的好奇心をもった市民でもあった。フランスでは19世紀を通じて新聞などのジャーナリズムが爆発的に発展し，小説がきそって読まれていたことがよく知られている[29]（ボウルビー 1989；山田 1991）。新聞を読むには

読み書き能力が必要であり，教会の説法を集団で聞くのとは違った意識のあり方が前提とされる。同様に，小説が描きだすのは，社会の規範や伝統との齟齬のなかで，個としての生き方を模索する主人公であり，この時期の新聞や小説の部数の爆発的な増加は，そのまま新しいタイプの意識をもつ個人の出現を物語っていたのである。

1836 年に発表されたバルザックの『老嬢』は，同年に発刊された低価格の日刊紙『プレス』に掲載された「史上初の本格的な連載小説」とされている（山田 1991: 60）。田舎都市の「老嬢」がたどった不幸な運命を描いたバルザックは，彼女に人間をみる眼が欠けていたこと，それゆえ人間観察と世界観を育成するための学としての人類学を開設することを求めているが（バルザック 1959: 362；菅野 2002），そうした要求はこの時代の多くの人びとの期待でもあっただろう。変化しつづける混沌とした時代であったからこそ，人びとは人間とはなにかについて問うていたし，聖書の創造説がもはや信をおけないものになっていたとすれば，太古からの歴史のなかでみずからの位置を確認することが必要であった。このとき，ブロカのはじめた自由聴講の学校は，人間と世界の秘密を暴くためには脳の中にまで手を突っ込むことも厭わない唯物論で武装すると同時に，西洋人を万物の頂点におくナルシスティックな人間観／世界観を提供するものであった。それは群衆として浮遊する人びとを人種的優越のうちに包摂し，劣等の「他者」に対する能動的主体として定立する，近代特有のイデオロギーとして機能したのである。

3　人種主義人類学と共和主義的帝国主義の誕生

ブロカの人種主義人類学がどのような特徴をもっていたか，それが従来の人種主義とどのように異なっていたかは，以上で明らかであろう。科学の装いをとったそれは，ナチズムにつながる近代に固有の人種主義を準備したが，それがたんに思想や科学の次元にとどまっていたのであれば，一時の流行に終わり，それほど大きな影響をもつことはなかったかもしれない。しかしながら，ブロカ派の人種主義人類学の教説は，植民地支配の進展とナショナリズムの高揚という，フランスがそれまでに経験したことのなかった新たな事態に結びつくことで，社会全体を動かすひとつの制度へと展開していった。ブロカ派の人種主義人類学（および英国流の進化論人類学）が示しているのは，ひとつの理論体系が他の要素と結びつくことで制度へと転化し，それが増殖していくことで社会を動かすようになる近代に特有のメカニズムなのである。

ブロカの人種主義のおよんだ射程を計測するために，少々迂回して，19 世紀なか

ばに書かれた2冊の本をとりあげたい。いずれも著者はアンヌ・ラフネルという，セネガルのダカールにおかれた西アフリカ総督府に勤務していた海軍軍人である。これらの本が興味深いのは，この2冊の本をへだてる10年という時間のあいだに，ラフネルの自己認識やアフリカの人びとに対する視線が，おなじ著者の手になるとは思えないほど大きく変化しているためである。そしてそのような変化を生んだものこそ，ブロカ派に代表される人種主義的言説が広く受容されるようになったという事実であった。

最初の本，『西アフリカ内陸への旅』が出版されたのは1846年である。ナポレオン戦争に敗れた結果，海外植民地のほとんどを奪われたフランスは，1830年のアルジェリア進出を梃子として，海外植民地の拡張を試みていた[30)]。西アフリカにおけるフランスの植民地は，セネガルの沿岸部とセネガル川沿いに築かれたいくつかの砦にかぎられていたが，そこを拠点として内陸部への拡張をおこなうことは，国内で陸軍におさえられていたフランス海軍の宿願であった（Kanya-Forstner 1969: 6）。ダカールに駐在していたラフネルが，2人の同僚とともに内陸部に派遣されたのはそのためであり，かれらには将来におこなわれるであろう植民地拡張にそなえて，内陸部諸社会の実態やそのあいだの対立関係，さらには産業や交易のありさまを探ることが使命として与えられていたのである。

探検が終わるとふたりの同僚は病いに倒れ，ただひとり残されたラフネルがダカールで書いたこの『西アフリカ内陸への旅』は，「他者」に対する公平な姿勢を貫いている点で興味深いものである。こうした視点は，18世紀末いらい最初に西アフリカを探検したマンゴ・パークやルネ・カイエとも共通するものであり，アフリカにいたったかれらが共和主義と人権宣言の落とし子であったことを物語るものであった（竹沢2001）。ラフネルのこの本は前二者にならって探検記の体裁をとっており，自然の景観や人びとの生活のありさま，道を先に進むことの労苦の記述をつづけたあとで，民族学と題する章のなかで諸集団の特徴を記述し，分析する。ここではそのうち，フルベとサラコレ，バンバラについての記述をとりあげたい。いずれも西アフリカのサバンナ地帯に住む有力集団であり，ラフネルの「他者」に対する視線が如実にうかがえるものである。

> フルベのもとでのイスラームは，アラブにおけるような盲目的で残忍な熱狂の過剰にいたってはいない。フルベにとってのイスラームは，倫理的コードにしてイスラームの無害な実践に過ぎないのだ（Raffenel 1846: 267）。
>
> ブンドゥのフルベは多くの人口をもち，エネルギッシュに統治されており，軍事的に強

固でないとはいえ，周囲の社会に優越し，友好に平和を維持する状態にある（ibid.: 279）。

今日，ガラムの国の住人であるサラコレは，農業と商業に従事する勤勉な人びとであり，ほぼ間違いなく遠距離交易に従事している（ibid.: 279）（図 4）。

戦争の業において隣人より優れているバンバラは，まことに恐るべき存在であり，ときには親族の争いを解決するために，ときには他の民族と戦うための補助として，しばしばその支持が求められている。バンバラの同盟は部族ごとにおこなわれ，かれらはたいていその勤めに忠実である（ibid.: 299）（図 5）。

バンバラはセネガル川上流地帯で，われわれが真剣に恐れなくてはならない唯一の黒人集団である。というのも，堅固に築かれた政府にしたがっているために，かれらの傲慢さをわれわれのもとに導くのが困難だからである（ibid.: 300）。

図 4　19 世紀前半には，アフリカの人びとを見る視線は人種主義に固まっていたわけではなかった。図 4 はバンバラの女性，図 5 はサラコレの男性の図。いずれも 19 世紀前半にセネガルに滞在した著者が，1853 年に出版した本からの転写（Boilat 1984: pl. 21, 24）。

これらの記述が示しているのは，ラフネルの「他者」のあいだの差異に対する敏感さであり，かれらを先入観なしにみていこうとする姿勢であろう。たとえば，フルベのイスラームは「倫理的」であり，かれらの社会は「エネルギッシュに統治されている」。一方，遠距離交易に従事するサラコレは「勤勉な人びと」であり，軍事に長けているバンバラは，「われわれが真剣に恐れなくてはならない」存在であるが，それは「かれらが堅固に築かれた政府にしたがっているため」である。西アフリカの諸集団を特徴づけているこれらの語彙が，ヨーロッパ人に適応されたとしてもなんら不自然な語彙ではないことに注意したい。ラフネルのなかには，先にみたような人種的偏

図 5

見に満ちたブロカ派の研究者からはとうてい出てこないような（注 18 参照），「他者」に対する公平かつ共感的な視線が存在したのである。

「他者」がそのようにヨーロッパ人と大きくは変わらない存在であるとすれば，かれらを支配しようとすることはなににによって正当化されるか。ラフネルは，これもこの時代の共和主義精神の発露である奴隷制反対の議論によって，それを正当化しようとする。アフリカ大陸内で奴隷たちが受けている悲惨について詳細に記述したあとで，かれはつぎのように語っている。「きわめて醜悪な人間の売買」（Raffenel 1846: 362）に他ならない現地の奴隷制を止めさせるためには，フランスの直接支配が必要だというのである。

> アフリカにおける奴隷制の廃止は，無意味な宣告であり，常軌を逸した夢想にすぎないのだろうか。いや，それは不道徳な制度なのだ。フランスは，野蛮なアフリカの片隅から発せられているこの声がわれわれの都市に達し，われわれの熱狂を掻き立てるであろうと期待させるだけの男らしい勇気と勇敢な献身をいまだ所有している。…（イギリスがしているように）黒人奴隷の輸出を妨げたところで，悪の源泉に達することはできない。奴隷制の原理は黒人諸民族の慣習のなかにあるのであり，それはあまりに深く根ざしているがゆえに，奴隷市場を閉ざすだけで消滅するものではないからだ（Raffenel 1846: 354，カッコ内は竹沢）。

かれらには「奴隷制」という悪しき制度があるがゆえに，フランス人の介入によってその制度と慣習を矯正し，かれらを「文明」の高みへと導いてやらなくてはならない。そうした優越意識は 19 世紀のヨーロッパ人に特有のものであったが，それが共和主義の精神から切り離されてはいなかったことを確認しておこう。そもそもラフネルが示していたような「他者」の制度と慣習の多様性への関心は，かれらに対するおなじ人間としての共感がなければ生じないであろうものなのである。

このように「他者」に対する共感と同情を含んだ 1846 年の著作に比較し，その 10 年後に出版された『黒人の国への新たな旅』を支配しているのは，おなじ著者のものとは思えないほど異質なトーンである。この本をつらぬいているのは，人種主義的視点から「他者」をみるゆがんだ視線であり，黒人は知的能力において劣る「子ども」であるがゆえに，「大人」としての白人が介入することで，かれらの発達／発展を手助けしなくてはならないとする自民族中心主義的な意識である。のちに「文明化の使命」として定式化されることになる優越意識が，すでにここには明確なかたちで示されていたのである。

われわれに比較するなら，黒人が子どもであることを誰が知らないであろう。われわれの務めは，かれらの悪しき本能におもねたり，かれらの悪しき傾向を助長したりすることではなく，これを正すことであることを誰が知らないであろう。…そうだ，黒人は育て方を間違った子どもなのだ。…子どもは恩知らずではないだろうか。子どもは貪欲で，要求的で，欲望に絶対的に従っていないだろうか。もし力がかれの手にあるなら，それはもっとも恐るべき暴君であるだろう。かれの上には理性は働かない。かれは欲し，拒絶はかれをいらだたせる。かれは弱ければ涙を流すだろう。そしてもしかれが望んでいた品を手に入れたなら，さらに別のものを要求するだろう。それが黒人であり，子どもなのだ（Raffenel 1856-1: 250）。

ラフネルのこの新しい本のなかでは，アフリカの人びとが発展させ，差異化させてきた諸慣習や諸政治形態は問題にされることなく，かれらは「恩知らず」の「子ども」であり，「本能」のままに生きる「暴君」だとして一括される（図 6）。そうであるがゆえに，白人はかれらに対して「大人」としてのぞみ，かれらのゆがんだ性格を矯正し，宗教と道徳を通じてかれらを正しい道へと導いてやらなくてはならないとつづけていく（Raffenel 1856-1: 250）。アフリカの人びとを「倫理的」で「勤勉」であり，「平和的に統治された」人びとだと語った先の記述からはけっして出てこないような差別的認識である。「他者」認識を根幹から変えたこうした記述を生みだしたのは，いったいなにであったのか。

その答えは，かれが人種主義的「生理学者」[31] の見解を受け入れたことにあった。

私がここであつかうテーマは重大なものである。教育，道徳，宗教というテーマだが，その原理を黒人に，何人かの生理学者がいうように知性もなく，人間よりも動物に近い存在に，適用しなくてはならないからである（Raffenel 1856-2: 233）。

「生理学者」の見解を受け入れるのであれば，かれらの語彙がアフリカの人びとの記述に適応されるのは必然であっただろう。この本でラフネルが関心をもつのは，もはや 10 年前の著作におけるような現地の人びとが作りあげたさまざまな社会制度や交易の実態ではない。この本でのかれの関心は，人びとの肌の色や顔面角，頭形，唇の形や鼻の形といった，人種主義人類学の基本要素の確認へと移っていくのである。

（バンバラの一クランである）クリバリのほかにはいかなる民族的タイプも存在しないのだから，バンバラのレポートを描いたり，その定義をしたりするのはまったく不可能である。カアルタ地方の住民のもとでは，黒檀の黒からシエナ黄にいたるあらゆる肌の色に出会う。そこでは，黒人種に特徴的な扁平な頭形から，北極海の遊牧民に特徴的な尖った頭形にいたるまで，あらゆる種類の頭蓋がみられる。ある種の人間のもとでは，ヨーロッパ人のプロフィールである鷲鼻，薄い唇，楕円形の顔をみることができる。とはいっても，一般に支配的なのはアフリカ人種のもとで知られている特徴である。顔面角はなんどやっても 74 度を超えることがない（Raffenel 1856-1: 258，カッコ内は竹沢）。

図 6　19 世紀の後半になると，西洋諸国の植民地政策の進展とともに，アフリカの人びとに対する視線は固定され，ステレオタイプ化され，ファンタジー化されていく。図はアフリカの儀礼と題されたもので，1889 年出版のアフリカ大陸の探検に関する本による（Buel 1971: 362）。

かれらのもとにも差異はある。肌の色の違い，頭形の違い，鼻や唇のかたちの違いが，かれらのもとでも観察される。「とはいっても，一般に支配的なのはアフリカ人種のもとで知られている特徴である」。かくして「他者」の差異は一般図式のなかに吸収され，民族の多様性は人種の同一性のなかに消滅し，残るのは白人と黒人の対立図式だけである。あまりにも見事な人種主義の展開であり，観察の固定的通念への吸収であるが，ラフネルがそれをおこなうためだけにアフリカの内陸部におもむいたとすれば，まったく無駄な営為であったといわなくてはなるまい（図 7）。

10 年というわずかな時間のなかで，これほどまでに「他者」に対する視線の違いが生み出された理由はなんであったか。その問いに答えるには，当時のセネガルおよび西アフリカにおけるフランス支配の実態について若干の説明が必要である[32)]。先にも述べたように，フランスはナポレオン戦争の敗戦で海外植民地のほとんどを失い，かろうじて残ったのがセネガルや中米のガダループであった。フランスの植民地拡張は 1830 年のアルジェリア侵攻によって再開されるが，48 年までにその大半を支配下

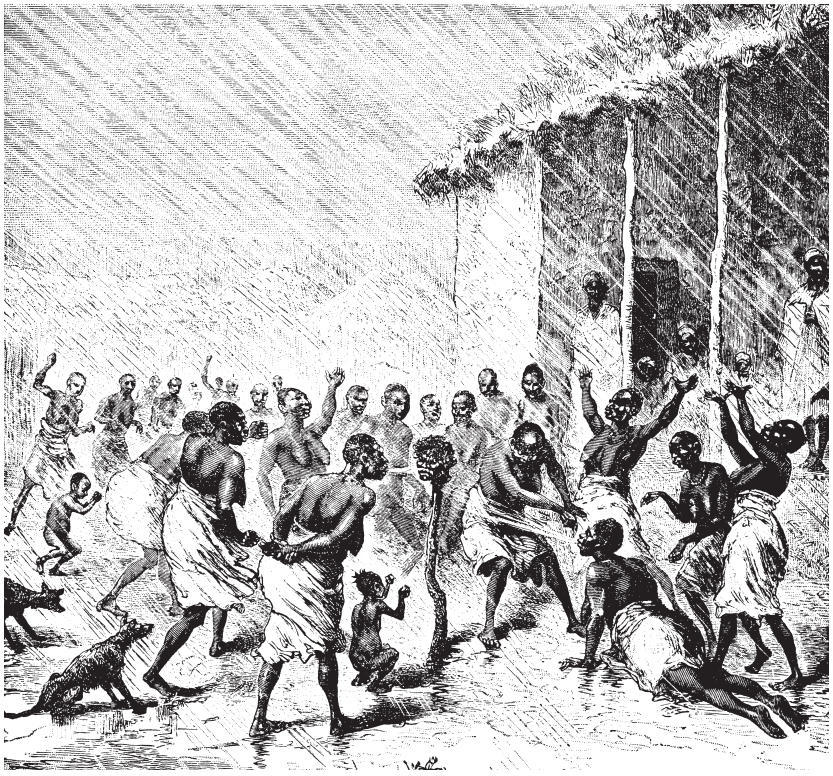

図 7　アフリカの人身供犠として紹介されたもの（Buel 1971: 306）

におさめることに成功すると，つぎに視線が向かったのはその南部の西アフリカであった。とはいっても，当時のフランス支配はセネガルの沿岸部やセネガル川流域のいくつかの砦にかぎられており，面的な支配は実現されていなかった。

状況を一変させたのは，1852 年よりダカールの総督府に勤務し，1854 年からセネガル総督になるルイ・フェデルブの着任であった。フェデルブ以前には，38 年間で総督が 37 人も代わるほど不安定な組織であったが，かれは 54 年から 65 年までセネガル総督をつとめるあいだに，総督府の組織を改革して，その権威を確立した。フェデルブはすでにアルジェリアとガダループで植民地統治を学んでおり，植民地経営には経済的基盤の確立と，現地人をとりこんだ軍事的覇権が不可欠であることを知っていた[33)]。またかれはアルジェリアではアラビア語を，ガダループではクレオール語を学習するほどの現地通であり，セネガルでは最大民族であるウォロフ語の習得に意欲的であった[34)]。このようにして，たしかに軍人／支配者としての立場からのみ接していたとはいえ，対象社会に深く入り込んでいたかれは，1871 年にはじまるフランス

第三共和政きってのアフリカ通として活躍することになる。かれは上院議員に選任されたほか，植民地拡張の母体となった地理学協会長，人類学協会長を歴任し，その著作も 10 冊を越える[35)]。フランスはのちにアフリカ通の行政官・軍人を輩出することになるが，その先陣を切ったのがこのフェデルブであった（図 6）。

フェデルブがいつブロカ派との接触を開始したかは，残念ながら今のところ不明である。ただ，かれの以上のような関心や活動を考慮するなら，おそらくかなり早い時期にその接触がはじまったと考えるのが自然であろう。実際，ブロカ派の『人類学協会年報』には，すでに 1860 年の創刊号にセネガルに勤務する海軍医師の「民族学的」研究が掲載されており（Benoït 1860），セネガルの総督府とブロカ派とのあいだに人類学協会設立以前から緊密な連携があったことが推測される。こうした連携が存在していたからこそ，セネガル内陸部の探検を終えたラフネルは，その著作を権威づけるために，当時フランスでもっとも権威ある言説のひとつであったブロカ派人類学の教説の吸収につとめたのであろう。ラフネルの 2 冊の本のあいだの差異を説明するのは，以上の経過であったと考えられるのである。

フェデルブとブロカ派の結びつきを説明する要因は，そのほかにもあった。フランスの植民地支配が進展したのは，1871 年にはじまる第三共和制の枠のなかであったが，この時期に国内のすべての党派が植民地の拡張に熱心であったわけではなかった。普仏戦争に敗れたフランスでは，大土地所有者とキリスト教会に基礎をおく王党派と，新興／小ブルジョワジーに支えられた共和派が対立していたが，前者は敗戦の汚名をそそぐべく，国内の戦力の強化（＝陸軍の強化）を重視し，海外植民地の拡張には熱心でなかった。フランスにおいて植民地拡張を主導したのは，海外での利益獲得に熱心な新興ブルジョワジーに支えられた政界共和派であり，現地でしばしば暴走して植民地を拡大した海軍軍人は，かれらに結びつくことで中央での支持をとりつけようとした[36)]。政界共和派—新興企業家—海軍軍人—人類学協会—地理学協会という結びつきが成立したのであり，1890 年代になって植民地の拡大がフランスの国益を左右する一大事だとの意見が支配的になるまで，この結合が実質的に植民地拡張の推進母体として機能したのである。

ところで共和派とは，1789年の大革命の諸原則を是とする諸党派を総称する名称であり，とりわけ大革命で発せられた万人の平等を説く人権宣言は，その結束の鍵となる公式のイデオロギーであった。とすれば，ここに問題が生じていたのではないか。万人の平等を説く人権宣言の精神と，多くのばあい住民の意思を無視して強行された植民地支配とは，どのようにして両立しえたか。共和主義者が植民地支配を正当化し

ただけでなく，それを積極的に進めたというのは，どうみても矛盾ではなかったか。

共和派を代表するジュール・フェリーは，第三共和制において植民地拡張にもっとも熱心な政治家のひとりであったが，1885 年にフランス下院議会で有名な発言をおこなっている。それは，人権宣言にもとづく共和主義と植民地支配とのあいだの矛盾を，なにより明確に浮き立たせる発言であった。

> 「諸君，より大声で真実を語るべきであります。優等人種は劣等人種に対してひとつの権利をもっていることを，率直に口にするべきなのであります」（ジュール・フェリー委員長）。
> 「あなたはそうした発言を，この，人権宣言が発せられた国において口にするのでありますか」（ジュール・メーニュ氏）。
> 「それは奴隷制と奴隷貿易の正当化だ」（ドギュッテ氏）。
> 「もしメーニュ氏が正しいのでありますれば，もし人権宣言が熱帯アフリカの黒人に対しても発せられたのでありますれば，あなたはいかなる権利をもってかれらに交易と交換を強制するのでありましょうか（右翼と極左から発言を制する声，共和派からは「そうだ」の声）。私はくりかえします。優等人種には，義務があるのだから，権利もあるのであります。劣等人種を文明化するという権利なのであります」（フェリー）（竹沢 2001: 67–68）。

優越人種と劣等人種，劣等人種を文明化する白人の権利（図 8）。巷ではゴビノーの『人間不平等起原論』によって，学界ではブロカ派人類学の主導のもとに発せられていたことばであるが，それがフランス国会で発せられたのはこれが最初とされる。しかしこのような，ある意味で身もふたもない人種主義的言説に依拠することによってのみ，共和派のフェリーは右派と最左派の反対を押し切って，植民地拡張という自分たちの政策を正当化することができたのである。

国民主権の原則に立つ共和主義的な国民国家のイデオロギーと，「他者」の強制的な支配を前提にする植民地主義が根底から矛盾するものであることを最初に指摘したのは，私の知るかぎりでは政治学者ハンナ・アーレントである。

> 永続性のある世界帝国を設立しうるのは，国民国家のような政治形態ではなく，ローマ共和国のような本質的に法に基づいた政治形態である。なぜなら，そこには全帝国をになう政治制度を具体的に表わす万人に等しく有効な立法という権威が存在するから，それによって征服の後にはきわめて異質な民族集団も実際に統合されうるからである。国民国家はこのような統合原理を持たない。それはそもそもの初めから，同質的住民と政府に対する住民の積極的同意（ルナンの言う「毎日の人民投票」）を前提としているからである。国民国家は征服を行った場合には，異質な住民を同化して「同意」を強制するしかない。彼らを統合することはできず，また正義と法に対する自分自身の基準を彼らにあてはめることもできない。したがって征服を行なえばつねに圧制に陥る危険がある（アーレント 1972-2: 6）。

図 8　西欧諸国による植民地化は，文明の西欧が未開・野蛮のアジアやアフリカを文明化するという「文明化の使命」の概念のもとに遂行された。図はフランスの象徴であるマリアンヌが，「蛮人たち」に文明の恩恵を分け与えているところ（Hugon 1994: 96）。

アーレントはこう述べて，国民の同意を基盤とする国民国家と，「他者」への法的・経済的制度の強制をともなう植民地支配という異質な二原理を内包させた近代の帝国主義は，支配地にもおなじ法の支配を適用した古代ローマなどの帝国とは原理的に異なることを指摘する。もし宗主国が，本国の国民国家の原則である国民主権と人権尊重を徹底させるとすれば，宗主国は植民地に対してもおなじ原則を適用しなくてはならないはずである。しかしながら，植民地の人びとが劣等人種であり，知的な「子ども」であることが確認されるならば，かれらが「大人」の段階に達したと判断されるまで，宗主国はその原則の適用を延期することができる[37]。共和派の政治家がかかげたこの人種主義のレトリックは，「共和主義的帝国主義」ともいうべき奇妙な構築物を作りだした。この構築物／制度は，その原理にしたがってフランス（そして他のヨーロッパ諸国）を動かすことになるが，有色人種を劣等人種とし，知的かつ倫理的に劣った存在であることを計測と世界各地の実例から証明しようとしたブロカ派らの人種主義人類学こそ，近代に固有のこの奇妙な構築物の不可欠の要素だったのである[38]。

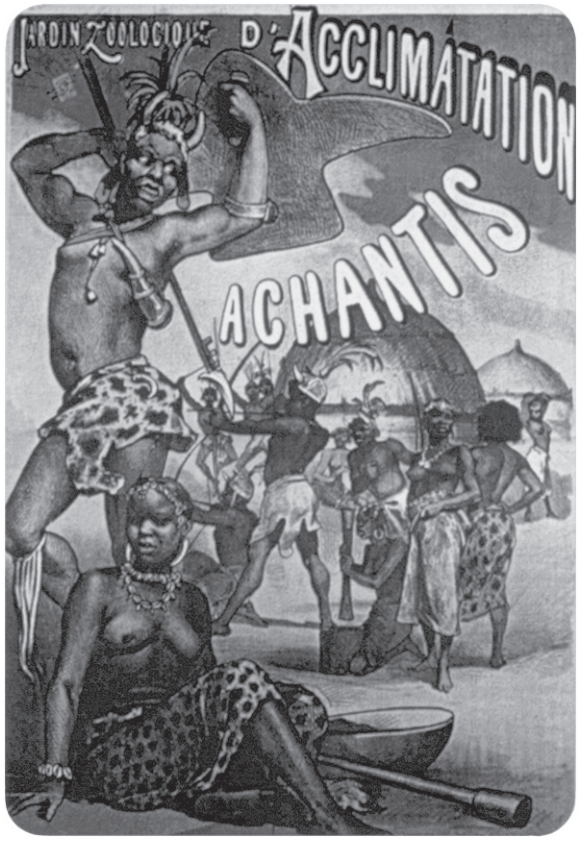

図 9　世界中の「蛮人」を展示する「人間動物園」は，19 世紀後半のヨーロッパやアメリカでたいへんな人気を呼んだ（Bancel 2002: 表紙）。

アーレントはさらに進む。支配地に本国とおなじ原則を適用した古代帝国と異なり，人種主義イデオロギーによってその適用を回避した近代の帝国主義は，みずからのなかに自己崩壊の芽をやどすことになった。というのも，人種主義的イデオロギーを内包することではじめて可能となった近代の帝国主義は，その人種主義が本国に還流した結果，国民国家を食い破る鬼子＝全体主義を生み落としたからである。その究極の形態がナチス・ドイツのファシスト全体主義であったにしても，他の西洋の植民地帝国も多かれ少なかれ排他的で人種主義的な「全体主義」に染められていたのであり，ここに近代世界のもつ根本的危機が存在していたというのである（アーレント 1972-2, 3）。アーレントの議論はさらに全体主義の起源を明らかにすることに向けられていくが，私たちとしてはそこまでついていく必要はない。ブロカに代表される人

種主義人類学が，共和主義的帝国主義という近代に固有の制度を作りあげるための不可欠の要素であったこと，そして植民地拡張が西欧の列強すべてを巻き込んだ時代的潮流となったかぎりで，この帝国主義的実践は，制度化され固定化された人種主義をフランスのみならずヨーロッパ中に普及させたことを確認できればよいのである（図9）。

1870 年以降海軍の主導のもとに，そして 1885 年以降はフランスの国力を挙げて遂行された植民地拡張政策は，イギリスやドイツ，ロシア，オランダ，ポルトガルなどのヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国を巻き込みながら，世界地図をこれらの諸国の勢力図にほかならないものへと描き換えていった。英国海軍につねに遅れをとっていたフランスは，フェデルブが断言していたように，アフリカ大陸に「カナダやインドに匹敵する西アフリカ帝国を建設する」ことを宿願とした（Kanya-Forstner 1969: 40）。多くの資金と人命をつぎ込んだその植民地政策の結果，フランスはアフリカ大陸に本土の 15 倍の面積をもつ植民地を獲得したが，それがどれだけ多くの犠牲に支えられたものであったことか。1898 年にフランス大統領は，「われわれはアフリカで気が狂ったようにふるまった」と嘆願したが（Kanya-Forstner 1969: 263），万国博覧会や植民地博覧会，学生用教科書などを通じて喧伝されたその事業は，フランス国民のほとんどを熱狂させただけに，それを途中で放棄することは不可能であった。かくして植民地拡張を国是とした共和主義的帝国主義は，その事業に全フランス国民を巻き込むことで，それが内包していた人種主義を国民全体の共通認識とさせたのである[39]。

4　デュルケームとナショナリズム社会学の成立

これまで論じてきたような文脈のなかでデュルケームをとりあげるとすれば，どのような問題構成が立てられるか。1 つは，初期の人類学のもっていた人種主義的／進化論的な志向性をデュルケームの社会概念がくつがえして，機能主義と呼ばれる新しい方法を文化／社会人類学にもちこんだという人類学の定説を再検討することである。このような学説史の要約では，人種概念と社会概念がどのような関係性にあったかが不明確であり，それゆえ社会概念がどのようにして練りあげられ，人種を軸に構成されていたそれまでの知の配置図をどのように変えたのかが問われないままに残っている。この問いの空隙を埋める作業がここで必要であろう。

第 2 に，ブロカが生涯人種主義的イデオロギーにとらわれていたのに対し，デュルケームは，世紀末フランスで反ユダヤ主義が猖獗をきわめたドレフュース事件では，

共和主義の原則に立って反ユダヤ主義を批判し，人種主義と密接にむすびつく進化論的思考に対してはくり返し批判をおこなっていた。こうしたかれの理論構築のうちに，人種主義をのり越えるための手がかりが得られないかどうかを検討していくことである。

第 3 に，ブロカの人種主義人類学の成立と展開を社会的背景のなかに位置づけてきたこれまでの問題意識に並行するかたちで，デュルケームの社会学の成立と展開をその時代的文脈のなかに置きなおしていくことである。あらゆる言説は政治的および社会的力関係と無縁ではないというのはフーコーの教えであると同時に，私たちの時代の共通認識のひとつになっている（フーコー 2000）。デュルケームの社会概念がどのような政治的／社会的な力関係のなかで練り上げられ，それに対していかなる反作用を引き起こしたかを考えることは不可欠な作業といえる。以上 3 つの問題意識に沿って，この章を考えていきたい。

デュルケームの経歴についてはよく知られているので，ここではとりあげない。ただ，1857 年にアルザスに接したエピナールという小都市で，ユダヤ人のラビの息子として生まれたかれが，13 歳で普仏戦争の敗戦とアルザスのドイツへの割譲に立ち会っていたことだけは指摘しておかなくてはならない。この敗戦は，啓蒙主義と大革命いらい普遍的な「文明」の名のもとに固有の価値体系をヨーロッパ中に輸出していたフランスにとって，それまで無縁であったナショナリズムを鼓舞するきっかけとなるものであった。そしてそのことは，共和主義的精神をもつユダヤ人においても例外ではなかった。フランスはすでに 1791 年に，すべての人間の平等を説く人権宣言に沿ってヨーロッパではじめてユダヤ人解放を実現しており，フランスの文化と政治に同化した「共和主義狂い」のユダヤ人を多く生んでいた（Birnbaum 1998；有田 2000）。フランス共和主義に殉ずるために，リセの学生だったときに先祖伝来の宗教を捨てたデュルケームも[40]，まごうことなきその一員だったのである。

人種主義と社会概念の関係性という問題意識に沿ってデュルケームをとりあげていくとすれば，ここで考察すべきは，フランスではじめて「社会科学」を冠した講座がボルドー大学に開設され，その講師としてデュルケームが赴任した 1887 年から，かれがフランスの学界でその地位を確立した 1900 年にいたるまでの，かれの行動であり，理論的発展である。デュルケームが生前にあらわした著作は，1912 年の『宗教生活の基本形態』をのぞけば，1893 年の学位請求論文である『社会分業論』，1895 年の『社会学的方法の規準』，1897 年の『自殺論』と，いずれも 1890 年代に発表されている。これに，1898 年に刊行が開始され，デュルケーム社会学をフランスの内外

に確固たるものとさせた『社会学年報』を加えるなら，かれの仕事の大半が 1890 年代に実現されていたことは明らかである。この時期におけるかれの理論構成がいかなるものであったかを，その時代的背景と相関させながらみていこう[41)]。

デュルケームの最初の著作である『社会分業論』は，90 年代に出版された他の 2 冊に比べるなら，それほど今日的評価の高いものではない。しかし，デュルケームのボルドー大学の講義録をみていくと，1887 年の「社会的連帯」をはじめ，88 年「家族」「カントにおける道徳と哲学」，90 年「法と慣習の生理学」，91 年「家族」，92 年「犯罪社会学」，93 年「犯罪社会学（つづき）」，94 年「家族」，95 年「社会主義の歴史」，96–99 年「法と慣習の一般物理学」など，この『社会分業論』につらなるテーマがほぼ毎年開講されていたことがわかる（Lukes 1985: 617sq.）。この時代の大学の講義は，正規の学生というよりむしろ一般市民からなる聴講生を対象とするものであったことを考えるなら（田原 1983: 149），この時期のデュルケームにとって『社会分業論』でとりあげた諸テーマが大きな意味をもっていたこと，そして聴講に来た市民にとってもそれがきわめて魅力的なテーマと映っていたことは，明らかであろう。学位請求論文であることもあり，かれの社会的関心とかれの社会のなかのポジションを良く示しているのは，名著の誉れの高い『社会学的方法の規準』や『自殺論』以上に，この作品なのである[42)]。

『社会分業論』はどのように議論を組み立てているか。出発点は分業であり，分業がいちじるしく進行したことが近代社会の一大特徴であることが，まず示される。その意味においてデュルケームは，アダム・スミスいらい西洋で広く流通していた分業を経済発展と社会発展の鍵とする通念を共有していたわけである。たしかに分業は生産効率を高め，人間とその社会がもつ製造能力をいちじるしく拡大した。しかし，分業の効用はそれだけではない，とデュルケームはいう。というのも，

> 分業がもたらす経済的貢献は，それがつくり出す道徳的効果にくらべればとるにたらぬものであって，分業の真の機能は二人あるいは数人のあいだに連帯感を創出することにある（デュルケーム 1971: 58）。

どういうことか。物を作ることを考えればわかるだろう。ひとりの職人が一から十までを完成させる前近代の生産様式に対し，多くの人間が分業にしたがう近代社会では，かれらのあいだの協働が必要不可欠になる。したがって，「分業の機能は社会体を統合し，その統一を確保することにある」のだというのである（デュルケーム 1971: 63）。

デュルケームはこの本のなかで，手を変え品を変えて，連帯が社会の基底にあること，それを正しく認識することが社会学の課題であることを主張する。そうした議論の展開においては，分業が生産の協働を必要とするとしても，そのことがただちに社会的連帯の存在を証明するものではないこと，また，分業の発展が初期資本主義の成立とほぼ一致し，その過程で職人の失業や労働者の貧困化などの社会的問題が生み出されたことは，深く議論されないままにとどまっている。かれによれば，過度の競争や労働者の貧困化，失業の増大，労使の対立の激化などの社会問題は分業がもたらした「病理学的」現象であり，それを正常に戻すのが社会学の役目である（デュルケーム 1971: 342sq.）。しかし，それらが資本主義生産様式の常数ではなく，病理学的だとする根拠はどこにも示されないのである[43]。

これらの社会的問題について詳細に論じる代わりに，デュルケームが関心を寄せるのは，法の存在であり，法が機能するための前提となる集合的感情の存在である。たとえば法が犯されたときを考えてみよう，とデュルケームはいう。ある人が犯罪行為を犯したとき，それは当該の人間だけを傷つけるわけではない。むしろそれが侵害するのは，法の存在を自明のこととし，それを受け入れながら生きている集合的存在であり，そのかれらが抱いている集合的感情である。だからこそ，犯罪者を処罰するのは当該の個人ではなく，その集合的意識を侵害された社会だと，かれは結論するのである（デュルケーム 1971: 90）。

『社会分業論』におけるデュルケームの議論を要約するなら，分業の背後には連帯があるはずであり，あらゆる社会が法ないし道徳を備えているのだから，それを支える集合意識ないし連帯があるはずだとする論理構造である。いいかえるなら，それは分業や法などの現実的事象の観察から社会的連帯の存在を論証していくという手法ではなく，存在するはずの社会的連帯を論証するために法や分業に言及するという論理，すなわち論点先取である。こうした論理の欠陥に目をつぶりさえすれば，この本においてデュルケームがなしえたことは，社会的連帯の存在を「論証」したことであり，社会学の対象をこの連帯ないし集合意識の解明にあると定義づけたことであり，社会の外延を法の範囲（すなわち国民国家）と一致させることで，社会学の対象を明確に限定したことであった[44]。

デュルケームがあえて論点先取を侵してまでその実在を証明しようとした社会的連帯とは，どこからきた概念であったか。かれの論議が上のように組み立てられていたとすれば，この社会的連帯の観念は，現実的事象に対するかれの観察と推論によって導かれたものではなく，外部からもたらされたものであったに違いなかった。そして

その外部とは，当時の社会および政界が切望していたひとつの要請であった。当時のフランスの政界は，1871 年の第三共和制の成立いらいつづいていた王党派と共和派との対立から，1885 年の選挙での後者の圧勝により，流れは決定的に共和派に傾いていた。しかしこの時期の共和派，とりわけ左派の急進派と呼ばれるグループは「赤カブ」と揶揄されていたように，外見は赤いが心は白＝王党派という代物であり，それが仮想敵としたのはキリスト教会である以上に，社会主義者やサンディカリストであった（Rabinow 1989: 185；喜安 1977: 159sq.）。

1880 年代末のフランスは，パナマ運河の出資金を募った上で会社を清算させたことで大量の破産者を生み出したパナマ疑獄や，ブーランジュ将軍のクーデター未遂事件などの政治的混迷がつづいており，国民統合の原理を再発見することがなにより緊急に求められていた。混迷する政治を建て直し，国民道徳をキリスト教とは違うかたちで再建し，社会のあいだの亀裂を埋めていくにはなにが必要か。19 世紀の最後の 20 年間におこなわれた議論の多くはそうした問題意識を抱えていたが，なかでも「社会連帯論」こそは，この時期にもっとも多く議論されたテーマのひとつだったのである（Donzelot 1994: 75）。

「社会連帯論は，第三共和制の公式イデオロギーになりつつあるようにみえる」。1909 年に『社会連帯論』をあらわしたデュルケーム学派のセバスチアン・ブーグレは，こう書いている（Bouglé 1909: 7）。この社会連帯論を政界においてもっとも声高に主張したのは，急進派の（「赤カブ」の）代議士レオン・ブルジョワであった。先にも述べたように，この時期の共和派が仮想敵としていたのが，右派の王党派／キリスト教会である以上に，最左派の社会主義者／サンディカリストであったとすれば，この社会連帯論は，労働者の国際的連帯のもとに社会を根底から改革しようとしていたかれらに対するイデオロギー的封鎖であったとみなすべきだろう。国家の定める法を重視し，法の遵守と道徳の強化による社会的連帯の樹立を説くそれは，意識の改善こそが社会の円滑な機能と社会問題の解決のために有効だと説く点で，社会構造の根本的変革を求める声に対抗するために生み出された一種の美辞麗句であったと判断されるのである（Donzelot 1994）[45]。

いまや，デュルケームの『社会分業論』がいかなる政治的志向性をもっていたか，いかなるものとして同時代社会に受容されていたかは明らかだろう。それは，社会主義者やサンディカリストの求める社会構造の根本的改革より，国民意識の変革を優先させようとする穏健な改良主義を理論づけることであり，法と道徳の賛美を通じての国民統合を説くことで，王党派と共和派に二分されたフランスをイデオロジカルに統

合しようとすることであり，1789 年いらい 4 度の革命に揺さぶられ，左右の対立に明け暮れていた政治の彼方に，一貫した原理をもち，基本的に善なるものとしてのフランス社会をナショナリスティックに言挙げすることだったのである[46)]。

「フランスではデュルケーム学派だけが大学にはいることに成功した」（Clark 1968: 38）。その理由はなにかと尋ねたクラークは，その答えをデュルケーム社会学のナショナリスティックな性格に求めている[47)]。デュルケームがひとりで開始したその社会学は，諸学のなかで一大潮流となり，やがては中等学校の教授資格取得をめざす学生全員に対する必修科目に指定されるなど，フランスの大学システムのなかで中核的な位置づけを与えられるようになっていく（Bellar 1973: xxxviii）。こうしたかれの社会学の科学的であると同時に世俗的な成功を説明するのは，デュルケームの学的厳密さとそれにもとづく学派の共同作業である以上に，それが当時の社会や政界の期待によく応ええたという社会的背景であったに違いなかった。

『社会分業論』において社会学の対象を限定することに成功したデュルケームは，2 年後の『社会学的方法の規準』を通じて，社会学を厳密な科学にするべく努力する。そこでかれがおこなったのは，全体＝社会はそれを構成する部分＝個人とは異質な性格をもつとの認識によって，社会を独自の法則をもつ実在として定義し，その分析のための方法を明確化することであった。

> この（結合という）原理によってこそ，社会は，諸個人のたんなる総和であることをやめ，諸個人の結合によって形成された体系をなすわけであるが，この体系は，それ固有の諸属性をそなえた独特の一実在としてあらわれる（デュルケーム 1978: 207–208，カッコ内は竹沢）。

さらに 1897 年には，自殺に関するフランスの統計をヨーロッパ諸国のそれと比較した『自殺論』によって，社会学が自殺という社会問題の解明と解決策の提言においても有効であることを明証する。かくしてデュルケームは，1890 年代の終わりまでに，独自の研究対象と独自の研究方法をもち，現実的諸問題に対する一定の回答能力をそなえた一科学しての社会学の構築に成功したのである[48)]。

以上のような 1890 年代のデュルケームの営為をたどってくると，際立った特徴として浮きあがってくるのは，社会学を厳密な科学として構築しようとするはげしい熱意と，社会の趨勢や社会的諸問題に対する鋭敏な意識である。このようにデュルケームの意識が同時代社会に向けられ，それへの処方箋の提出を志向するものであったとすれば，世紀末フランスの国論を二分したドレフュース事件に際して，かれが沈黙を守ろうはずはなかった。フランスで最初に「人種」の名のもとでユダヤ人排斥運動が

生じたこの事件において，かれは共和主義者として積極的に行動したばかりか，有力雑誌においてドレフュース擁護の論陣を張っている。デュルケームが人種概念に対してどのようなスタンスをとっていたか，かれの社会概念と人種概念がどのように微分化されるかを理解するために，この事件を少しくわしくみていこう。

この事件は多くの社会的勢力をまきこんだ複雑なものであったため，事件の展開は表に整理することとし（表 2），私たちの議論と重なる点についてだけ説明していく。フランス軍の一将校であるドレフュース大尉が，ドイツ軍のスパイであるとして告発され，軍事裁判で有罪を宣告されたのは1894年のことである（この裁判では，証拠とされた電報の筆跡鑑定がブロカ派のアルフォンス・ベルティヨン（Alphonse Bertillon）によっておこなわれ，これがドレフュース有罪に決定的に寄与した）。その後，親族からの再審請求がくり返し出されるがいずれも却下され，事件は社会化されることはなかった。事件が急転するのは 2 年後の 1896 年になってであり，再調査を指示されたピカール少佐が，ドレフュース有罪の決め手とされた電報が偽造であることを確認する。そして翌 97 年になると，上院副議長のミシェル・ケストネル，高等師範学校司書リュシアン・エールらによる再審請求が本格化するのである。

ドレフュースを有罪とするのは，キリスト教会をはじめとする保守派の面々であ

表 2　ドレフュース事件の経過

1894.10	ドレフュース事件勃発　ユダヤ人一将校がドイツスパイの嫌疑で告発
	ブロカ派のベルティヨン，ドレフュースの筆跡鑑定で有罪を断言
1894.12	軍法会議，全会一致で有罪判決　ギアナへ無期懲役
1896. 3	参謀本部から調査を命じられたピカールが，書類が偽造であることを発見
.11	ベルナール・ラザール『誤審―ドレフュース事件の真相』出版
1897. 7	上院副議長のミシェル・ケストネル，ドレフュースの再審を求める
. 8	高等師範学校司書リュシアン・エールを中心に，知識人の再審要求開始
1898. 1	エミール・ゾラ，クレマンソーの新聞『ロロール』に「われ弾劾す」発表
. 1	人権同盟成立　知識人の署名
. 2	ゾラに有罪判決　→イギリスへ逃亡
. 3	総選挙で左派が進出するが，ドレフュース再審を公約にしたジョレス落選
. 8	アンリ中佐，ドレフュースの手紙を偽造したことを認める，のち「自殺」
.10	破棄院，ドレフュースの再審請求を受理
.12	フランス祖国同盟成立
1899. 8	軍法会議によるドレフュースの再審　→ふたたび有罪
. 9	ドレフュースの特赦
1900	反ドレフュースの先鋒であったアサンプシオン修道会解散
1905	ジョレスの統一社会党結成
.12	政教分離法公布

り，その論理はつきつめれば，「ドレフュースは有罪である。なぜならかれはユダヤ人だからだ」とするものであった[49]。荒唐無稽な議論であるが，単純であるだけに，それがフランス国民のあいだに眠っていた反ユダヤ感情に火をつけたのは間違いなかった。一方，ドレフュースの再審を請求する側の根拠となったのは，ドレフュースがユダヤ人だという理由で差別されることは許されず，裁判は万人に対して公平でなくてはならないとする共和主義の原則であった。両陣営はそれぞれ人権同盟と愛国同盟をつくるなどして対立し，数の上で優勢な反ドレフュース陣営は，ドレフュース擁護派の新聞社や書店に焼き討ちをかけ，支援の教授陣の講義を妨害するなど，事件は泥沼化していった[50]。

この事件当時，ボルドー大学の教授になっていたデュルケームは，人権同盟のボルドー支部書記長としてドレフュース擁護のための活動を開始する。また，1897 年 1 月にはじまる「知識人の署名」には真っ先に名を連ねたし，反ドレフュース派の大御所であり，当時もっとも権威のあった雑誌『両世界雑誌』の編集長であるアカデミー会員フェルディナン・ブリュヌチエールの論文に反論をよせるなど，その活動には目覚ましいものがあった。主要著作をやつぎばやに発表することで学問的栄誉をすでに手にし，しかも社会的問題に関心をもっていたとはいえ，どちらかといえば書斎の人間という印象の強いかれが，このような行動に出たのはなぜか。

反ドレフュース派には，極右の凝り固まった反ユダヤ主義者から，国家と軍の権威の維持だけを求める穏健派までの幅があったが，かれらを共通して動かしていたのは，ドレフュースの再審が国の中枢にある軍の権威を失墜させ，批判精神と個人主義が過剰になることで社会の混乱を招きかねないという危機意識であった。これに対しデュルケームらは，公正を旨とする共和主義の精神がなにより重要であること，それを欠くなら社会的連帯も国民意識も成立しえないことを主張した。ドレフュースの再審を求める根拠として，「文明人のあいだの不壊のむすびつきの唯一の絆である正義」（アーレント 1972-1: 214）を強調したのは，「猛虎」とあだ名され，のちに第 1 次大戦を終了させる首相となるクレマンソーであったが，おそらくデュルケームもまたおなじ意見であっただろう。

もっとも，共和主義を擁護するといっても，共和派に属する政治家の多くはドレフュースの再審請求に無関心であったし，最左派の社会党についてもおなじであった。国民のあいだに生まれていた反ユダヤ主義が猖獗をきわめているかぎり，ドレフュースを擁護することは反対票を招くだけでしかなかったためである。実際，デュルケームによって説得されたとされる，リセいらいの友人である社会党代議士ジャ

ン・ジョレスが[51]，1898 年の総選挙でドレフュース再審を公約に掲げて出馬したとき，全体としては社会党が躍進したにもかかわらず，かれは落選の憂き目をみた（木下 1963；村田 1999）。

以上のような状況をさして，フランス現代史の専門家たちは，当時のフランスに「ふたつのナショナリズム」が存在していたと考えている。人権の尊重と公正の実現をなにより重視し，これらの理念のもとでの国民統合をめざす共和派の「開かれたナショナリズム」と[52]，血や歴史の共有を第一にし，身体のうちに血肉化した言語や文化を国民統合の原理とする「閉じたナショナリズム」とである（ヴィノック 1995；有田 2000）。後者の血のナショナリズムはとりわけドイツおよび中欧で繁茂したことが知られているが[53]，それは「開かれたナショナリズム」の代表格とされるフランスにおいても存在していたのであり，人種主義と不可分に結びつきながら，もうひとつのナショナリズムと危うい対抗関係を作りあげていたのである。

共和主義のナショナリズムと血／人種主義のナショナリズムが拮抗する状況のなかで，デュルケームの社会概念はいかなる位置を占めえたか。デュルケームは明らかに人種主義に反対する姿勢をとっていたが，かれを人種主義からへだてていたのは共和主義の精神であって，かれが明確化した社会の概念ではなかった。すでにみたようにデュルケームの社会概念はナショナリスティックに構築されたものであったが，ナショナリズムは共和主義を核としても，血と歴史を核としても成立しうるがゆえに，人種主義に利用されることはあっても，それへの対抗言説になることはできなかったのである。そもそも社会的連帯の存在を先取りし，構成メンバーのあいだの集合意識を分析対象とするかれの社会学は，階級意識であれ人種主義であれ，人びとを分断しつつ，社会統合そのものをつき崩していくような概念と実践について理解することは不可能であった。人種主義が自己と他者の関係／分割にかかわる言説と実践であるかぎり，ある人間集団の内的統合を前提にするかれの社会学は，それを病理的として断罪することはできても，それを深く理解／批判することは最初からできなかったのである[54]。

人種概念と社会概念，そして人類学史の接点であるこの点について，もう少し考えていきたい。デュルケームの功績は，その外延が明確にさだめられ，独自の構成原理をもつものとしての社会概念をつくりだしたことであったが，それが社会学の発展を準備しただけでなく，マリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンを介して人類学に導入されて，大きな革新を実現したのは周知の通りである[55]。たしかに，世界各地の諸民族の慣習，制度，器物の調査・収集をおこないながら，その理解のためには，それら

を進化という時系列に沿って並べることしかできなかった進化論的＝人種主義的人類学にくらべるなら，個々の社会に考察の枠を限定し，それを構成する諸制度のあいだの関係性を「機能」の語のもとで理解しようとしたデュルケームに由来する機能主義人類学の方が[56]，対象社会とそこに住む人びとの理解のためにははるかに先を行っていた。

しかしそれは多面で，「他者」の社会の内的構成原理を明らかにすることをめざすものであり，「他者」の社会と他の社会のあいだの関係性や，植民地支配された「他者」と植民地支配する「自己」のあいだの関係性を問題にすることはなかった。この点で，共和主義者や社会主義者を輩出したデュルケーム学派から，植民地支配に対する批判的言説が一度も提示されなかったことは示唆的であった。社会間であれ個人間であれ，人種主義が自他の関係性にかかわる概念であるかぎり，ひとつの社会の内的構成原理の解明に沈潜していくデュルケーム社会学とその影響を受けた人類学は，自他の関係性の一定式化としての人種概念について深い議論を生み出すことはできなかったのである。

一方，デュルケームの意識を支えていたもうひとつの柱である共和主義の精神は，たしかに人種主義を批判的に乗りこえる可能性をもっていた。しかしそれは他面で，ナショナルな境界に沿って人びとを分断し，選別／排除する方向性を内包させたものであった。そのことを悲劇的な仕方で示したのが，デュルケーム学派がその後たどる運命であった。ドイツとの世界戦争が勃発し，熾烈な戦いがつづいていくなかで，デュルケームは戦争鼓舞のためのプロパガンダをおこなうようになり，学派の若いメンバーはみずから戦場におもむき，多くはそこで命を失った。

人類学の珠玉の名編「右手と左手」を書いたロバート・エルツは，ユダヤ人であり社会主義者であったが，戦争がはじまるとフランス・ナショナリズムに進んでその命をささげるようになる（図 10）。かれが戦場から若き妻に書きおくった手紙は，かれの命の喪失と，戦争がさらに戦争を呼ぶことになるその後の歴史を思うと，胸を打つ痛ましさがある。「愛しい妻よ，ぼくは幼い頃，そしてリセの生徒になって，あのアルマ大通りの家の台所脇の部屋で夢見ていたことを思い出す。フランス人になりたい，なるに値したい，フランス人であることを証明したい，とぼくは心から願っていた。…いまや，この古くて幼稚な夢が，かつてなかったほど熱くぼくの内に戻ってきている。…ぼくを受け入れ，ぼくを満たしてくれている祖国への謝意に，ぼくは貫かれている」[57]（有田 2000: 339-4 に引用）。

才能と善意にあふれていたエルツの死を招いたのはフランスの「開かれたナショナ

図 10　30 歳代の若さで命を失った,「右手と左手」の著者エルツの肖像（Needham 1973）

リズム」にほかならなかったが，そのナショナリズムに，ユダヤ人としてではなく，一フランス人として殉じたことはかれにとって望ましいことであったのか。内部においては人種主義に対抗しえた「開かれたナショナリズム」であっても，その外部に国境という選別と排除の境界を生み出さざるを得ないとすれば，人種主義の選別と排除を別の選別と排除の原理でおきかえただけではないか。とすれば，人間とその集団は選別と排除のメカニズムから逃れることは不可能なのか。あるいは，さまざまな人間の結合の諸形態をもういちど根底から見直していくことで，選別と排除をのりこえる原理を見出すことは可能なのか。

人種をめぐっておこなわれてきた私の考察は，19 世紀に西ヨーロッパでつくりだされ，その後世界の運命を動かしてきた社会，国民国家，ナショナリズム，文化などの概念を考え直すと同時に，それら超えたところに人間とその集団を理解するための方法を考えていくことの必要性を示していると思われるのである。

5　結　　論

私は本稿のなかで，まずブロカにはじまる人種主義人類学の発展とその社会的影響

の拡大をたどってきた。科学の装いをとったそれは，古くからあいまいなかたちで存在してきた人種主義に新しい基盤と方向づけを与えると同時に，とりわけ植民地争奪という歴史的過程のなかでひとつの使命を与えられることになった。黒人や有色人種の劣等性を「科学的」に根拠づけたその理論は，白人の支配者＝「われわれ」と有徴の（有色人種の）被支配者＝「かれら」のあいだに存在上の差異を導入したし，国民の平等と合意を統合原理とする本国に対し，植民地にはおなじ法的地位を与えないことを基礎とする共和主義的帝国主義という奇妙な代物をつくりだすことに，それは決定的に寄与したのである。

共和主義的帝国主義によって主導された植民地の争奪戦がひととおり完了し，世界がヨーロッパ諸国の手で分割され終えたとき，それまで外部に向かって拡張されていた人種による排除と選別のメカニズム，およびそれに付随する支配者としての自己意識形成のメカニズムは，国民国家の内部へと屈折していった。人びとをその生まれと身体的特長によって選別／排除するこの分割のラインは，国民国家によって埋め尽くされたヨーロッパの諸国家の内部で，真の国民とはだれか，真の国民からなる国家を建設するにはだれが排除されなくてはならないか，を問うものとなっていったのである。ヨーロッパにおいて反ユダヤ主義が政治の前面に登場したのは 1870 年以降，とりわけ 1880 年以降とされている（ヴィノック 1995: 150）。この時期以降，ヨーロッパ全土で広まった反ユダヤの人種主義とは，国民国家を軸に外部へと拡張していた人種による境界形成＝自己意識形成の運動が国民国家の内部へと折りこまれことによって生じた，19 世紀の国民国家＝帝国主義の必然の産物だったのである。

このとき，ナショナリスティックに構築された社会内部の集合的感情と社会関係を研究対象とさだめたデュルケーム社会学は，人種主義に対抗する言説となることはできなかったし，それについて語ることすら不可能であった。たしかに，独自の構成原理をもつものとしての社会概念をつくりだしたことはデュルケームの功績であり，それは社会学の発展のみならず，文化／社会人類学の根本的革新を可能にした。しかしそれは，「他者」の社会の構成原理を明らかにすることをめざすものであり，「他者」のあいだの関係性や，植民地支配する「自己」と支配される「他者」のあいだの関係性を問題にするものではなかった。ひとつの社会の内部に沈潜していくデュルケーム社会学と，その影響下に自己成型した西欧の社会人類学は，自他の関係性の一形式としての人種概念とそれが生み出す諸結果について，フィールドで直接眼にしていたにもかかわらず（あるいはそれゆえに），深くは問わないままに過ごしてきたのである。

私には，デュルケームおよびその後の文化／社会人類学の積み残した課題は，今日

までそのまま課題として残されているように思われる。文化／社会人類学は，あまりに安易に自己を「他者研究」「異文化研究」の学として規定してきたのではないか。むしろ問題は，自己から切り離されたものとしての「他者」研究ではなく，「他者」のあいだの関係性であり，「自己」と「他者」の関係性であり，私たち自身と世界とを輪郭づけているそれらの関係性が，いかなる概念と実践によって生み出され，どのような制度として人びとの意識と行動を規定しているかを明らかにすることにあるではないか。文化／社会人類学を，さまざまな排除と包摂の関係性のなかで，人びとが集団形成と世界構築のためにつくりあげてきた諸概念と諸実践にかかわる学として規定しなおすならば，人種について論じることは間違いなくその主要な課題のひとつになるはずである。

国民国家，民族，共同体，人種，文化，性／ジェンダー。人びとを統合／分割する境界は複雑にからみあいながら存在し，複数の境界の干渉のなかで生きている人びとの意識のなかに影響し，かれらのアイデンティティに濃淡のある枠取りを与えている。人間のアイデンティティはひとつではなく複数である。アイデンティティはより柔軟にかつ流動的になっている。美しいことばではあるが，あまりに軽すぎないか。それは，みずからのアイデンティティについて自問しないで済む，強固な（強固であると信じさせられてきた）国民国家の枠内で生まれついてきた人間の軽口なのではないか。

国民国家をはじめとするさまざまな境界のせめぎあいのなかで，人びとがアイデンティティ構築に葛藤している状況に注目すると同時に，人びとを分割し，排除する諸境界が人びとの意識のなかに織り上げている織目をていねいにほぐし，もういちど望ましいものへと織り直していくこと。文化／社会人類学の可能性のひとつは，そうした作業をおこなっていくことにあるのではないだろうか。

謝　　辞

本稿のもとになったのは，竹沢泰子京都大学助教授が組織する「人種の表象と表現をめぐる学術的研究」（京都大学人文科学研究所）での発表である。発表の機会を与えていただいた竹沢泰子助教授，コメンテーターをつとめていただいた渡辺公三立命館大学教授をはじめ，貴重なご意見をいただいた方々に感謝する。本稿の脱稿後，竹沢泰子編著『人種概念の普遍性を問う』（人文書院，2005 年）が出版されたが，残念ながらその内容を本稿にとりこむことはできなかった。また，本稿には，国立民族学博物館の共同研究「ポストコロニアル・アフリカ」（代表　竹沢尚一郎）での発表と対論の成果をとりいれている。この共同研究に参加された諸氏にも深く感謝したい。

注

1）欧米における民族学協会の設置年は，以下のとおりである。パリ民族学協会（1839 年），ニューヨーク民族学協会（1842 年），ロンドン民族学協会（1843 年）。一方，人類学協会の方は，本稿で論じるブロカが 1859 年に築いたパリ人類学協会が最初であり，その成功をみて，ワシントン人類学協会（1859 年），ロンドン人類学協会（1863 年），マドリッド人類学協会（1865 年），ドイツ人類学雑誌（1865 年，1870 年にドイツ人類学／民族学／先史学協会），モスクワ自然史協会人類学部門（1866 年），などがあいついで設立された（Broca 1869）。各地の人類学教会の設置は，ブロカ派人類学の世界的名声を証拠立てるものであった。

2）6 つの人種のうち，主要な 4 つに関するリンネの説明は以下のようである。「白いヨーロッパ人――創意性に富む，発明の才に富む。…白い，多血性…。法律にもとづいて統治されている。赤いアメリカ人――自己の運命に満足し，自由を愛している…。赤銅色，短気…。習慣に従って自らを統治している。蒼いアジア人――高慢，貪欲…黄色っぽい。憂鬱…。世論によって統治されている。黒いアフリカ人――狡猾，なまけもの，ぞんざい…。黒い，無気力。自分の主人の恣意的意思にもとづいて統治されている」（ポリアコフ 1985: 213–4 に引用）

3）リンネにならって，フランスの博物学の大家であるキュヴィエ（Cuvier）も肌の色の違いによって人種を区分したが，それに対してロンドン民族学協会を創設したプリチャード（Prichard）は強い懸念を表明した。肌の色の違いにはさまざまな段階があるため，どこに境界をもうけるかは微妙な問題だというのである（Stocking Jr. 1973）。実際，人種区分にどのような身体的特徴を組みあわせて採用するかで，キュヴィエの白人／黒人／黄色人の 3 区分から，19 世紀末のトピナール（Topinard）の 20 種までの偏差があったし（Hovélacque et Hervé 1886: 593sq.），人間と類人猿のどこに境界を引くかについては，19 世紀を通じて見解が分かれていた（Curtin 1973: 368sq.）。

4）ここでは「人種主義」をつぎのように定義する。ある人間の集団は，生得的にある種の身体的・心理的・知的な特徴および欠陥をもち，それは終生変わることがないとの観念によって，その集団ないし構成メンバーを差別ないし排除する思想と実践。この意味でいえば，ヨーロッパにおいてユダヤ人が差別されてきたのは事実だが，その先祖がイエス・キリストを裏切ったとの宗教意識によって差別されていたとすれば（それゆえその宗教を捨てれば差別がなくなるとすれば），人種主義と呼ぶのは適切ではない。これに対し，近代になるとユダヤ人はユダヤ人だというその出自によって差別されるようになったのだから，人種主義の対象であったといえる。黒人に対する差別も，かれらを肌の色などの生物学的条件によって差別しているかぎりで同様である。

5）英国で奴隷制に反対し，植民地支配の拡張に脅かされている人びとの保護のために活動したのが，トーマス・バクストン（Thomas Buxton）らのクェーカー教徒を主とする人道主義者であった。かれらは 1837 年に「現地人保護協会」を設立し，奴隷制批判のための議会活動をおこなったほか，「非文明諸部族の性格，慣習，欲求についての情報の収集」にあたっていた。1843 年のロンドン民族学協会の設立母体となったのはこの協会であり，人類学史のストッキング・ジュニアによれば，「英国人類学のもっとも古い先祖は，非ヨーロッパ人の研究ではなく，脅かされている肌の黒い人びとを保護するための人道主義的活動にあった」のである（Stocking Jr. 1987: 240–244）。

6）国連のなかでも，とりわけユネスコはこの運動に熱心であった。文化相対主義を明確に打ち出したことで人類学の名著として名高いレヴィ＝ストロースの『人種と歴史』も，ユネスコの要請にしたがって書かれたものである。一方，わが国がこの「人種差別撤廃条約」を批准したのは，国連での決議から 30 年を経過した 1995 年のことであり，国連が反人種差別法の制定を求めているにもかかわらず，今日までそれを制定していない。ここには，人権をめぐるわが国政府と国民のある種の鈍感さを認めるべきであろう。

7）政策に根本的な違いをもたない 2 大政党制をとるアメリカ合衆国では，年収や資産に沿って人びとを区分するより，文化や人種の線に沿って区分するほうが人びとを囲い込みやすく，それゆえそれにもとづいて是正措置がとられたのであろう。政治によって歪曲化されていたとはいえ，このかたちのアファーマティブ・アクションは，出自を政策の基礎とした点

で，国民の意思を基礎とすべき共和制の原則に明白に違反するものであった。その意味で，それが失敗したのは当然であった。

8）　ここで議論の前面に登場したのは，チャールズ・タイラーや，ウィル・キムリッカ，マイケル・ウォルツァー，ナンシー・フレイザー，セイラ・ベンハビブなどの政治思想家であった（タイラー 1996；キムリッカ 1998；ウォルツァー 1999；Fraser 1996；Benhabib 2002）。一方，米国文化人類学のなかでも，文化のなかに政治性や支配／対抗を読みとろうとするカルチュラル・スタディーズに近い研究者たちは，この問題に積極的に関与した。この点については，米山（2003）参照。

9）　ガスコーニュ地方を含むフランス南西部は，伝統的にプロテスタントの牙城であった。カトリックが主流のフランスでは，プロテスタントであることはそれだけで少数派として位置づけられることを意味していたことに注意したい。ブロカの編著を編んだ萬年と岩田は，かれの生涯の特徴である反カトリシズムをその家系に帰しているが（1992: 1），一理あるかもしれない。ブロカの経歴は基本的に Schiller（1979）によることとし，断わりのないかぎり，そのページ数を記す。

10）　この頃のブロカについて，つぎのように記述されている。「すでに 30 歳にして，将来臨床医および学者として世に立ってゆくために必要なすべての資格を取得し，パリではすでに知名の士となり，優れた業績によって海外でも知られ始めたブロカ…」（萬年・岩田 1992: 22）

11）　ブロカの雑種論は，かれの人類学的著作の最初の作品というだけでなく，環境との相互作用のなかでの種の進化を説くラマルク説に依拠している点で興味深いものである（Broca 1870）。それは，神の手によるすべての種の創造と，それゆえに種の絶対不変を説くキリスト教会の教えとは明確に対立するものであった。そして，ブロカの言によれば，「注意深く外交手腕に長けた」（ibid.: 182）キュヴィエは教会の教義に反しないようつとめていたのである。

12）　6 年後の 1865 年になると，人類学協会は「公共の福祉」に貢献すると認められて，警官の立会いは廃止された。カトリック教会や保守派からの攻撃はつづいていたが，ようやく公認の協会としての地位は保全されたのである。

13）　もちろんフランス国内でも，その影響は広範囲におよんでいた。たとえばこの協会の結成と同年の 1859 年には，パリ民族誌学協会が結成されたが，その目的は「人間社会と文明の研究」に限定されていた（Dias 1991: 53）。文字と「文明」をもたない人びとの研究はブロカ派人類学にゆだねざるを得ないほど，その影響力は強大だったのである。ところで，パリ民族誌学協会を率いていたのは，熱心なキリスト教徒であり，パリ東洋語学校で日本語教授であったレオン・ド・ロズニー（Léon de Rosny）であった。かれの協会は，ブロカのそれほど専門化できず，「アマチュアの協会としての性格を脱することができなかった」と評されるが（Dias 1991: 50），そこからはアフリカニスト協会やアメリカニスト協会など，のちにフランスの人類学研究の成立・発展に大きく寄与する団体を誕生させている（ibid.: 53）。その意味では，フランスの文化／社会人類学の発展に貢献したのは，ブロカ派の人類学協会である以上に，こちらの協会だったのである。

14）　のちにみるように，人種間の絶対的格差を説くブロカの人類学派の教説は，植民地経営の現場にあたっていたフランス海軍軍人のあいだで熱烈に受け入れられ，かれらの植民地支配の確立に大きく貢献した。そのことをなにより示すのが，1910 年にセネガル総督ウィリアム・ポンティがブロカ派の意向を受けて，白人と黒人のあいだの混血児に生殖能力その他が備わっているかを確認するための調査を西アフリカ全土に命じたというエピソードであろう（Conklin 1998: 68）。しかしこうした複数起源説は，進化にともなう種の多様化を説くダーウィン進化論の発展の前に影響力を失っていき，ブロカ派のなかでもしだいに劣性になっていった（Hammond 1980）。

15）　ブロカ派のうちでは，上院議員に推挙されたブロカをはじめ，オヴェラック，モルチエのふたりが戦闘的な共和派代議士として活躍した。また，ブロカの人類学協会の設立に際しても，のちの人類学学校の設立に際しても，保守派は秩序撹乱的な唯物論者の集まりだとして，その設立にはげしく抵抗し，妨害したのである（Kremer-Marietti 1984）。

16）　こうした頭形や脳の容量の計測において，ブロカに先行していたのは，千個以上の頭蓋を計測したアメリカのモートンであった。この点については，竹沢泰子（2003）を参照。

17）　計測と数量化によって人間を分類する試みを根本的に批判するグールドは，ブロカの実験結果が，白人を最上位に位置づけようとするかれのイデオロギーとしばしば矛盾していたことを指摘している。それを調停するために，ブロカはさまざまな珍説を編み出したばかり

か，ときにはいくつかの数字を操作することさえあった（グールド 1998: 140sq.）。

18）その点でブロカは，19 世紀末以来フランスで広まり，のちにナチスとともにそのピークに達する反ユダヤ主義の先駆者ではなかった。ところがその一方で，かれは黒人に対しては露骨な差別意識を表明している。「顎の突き出た顔，黒ずんだ皮膚，知的および社会的劣等性は，しばしば相伴って出現する。一方，白っぽい皮膚，直毛，垂直な顔は，人類のもっとも高等なグループの通常の資質である。…黒い皮膚，縮れ毛，顎の突き出た顔をもつグループは，かつて自力で文明を起こしたことがなかった」（Broca 1866）。ブロカ派の人類学者であるキャトルファージュにとっても，意見はおなじである。「ニグロは知的な畸形である。ニグロは，身体は種の最終的な形態を獲得しているが，知性は全体として途中で止まったままである。…その身体は一人前だが，その精神的能力は子どもにすぎない。…これらの特徴は，白人においては子どもにみられるものであり，成長とともに教育のおかげで失われていくが，ニグロにおいては生涯そのようなものとしてとどまりつづけるのである」（Quatrefages 1843: 757–758，強調原文）。

19）ラプージュは人類学学校で学んでおり，いわばブロカ派人類学の第 2 世代であった。モンペリエ大学で「人類学と政治科学」を講義したかれは，1878 年の開講講演でつぎのような人種的偏見にみちた発言をおこなっている。それは，のちのナチスによるユダヤ人排除を予測していたかのようであった。「戦争はますます人種間の生存競争になっており，もっともエネルギッシュな人種が，進化の段階において遅れた人種にとって代わるための手段になっている。地球上に流れる血は劣等人種のそれであり，太陽の下でのかれらの場所は血の代償とともに優等人種によってあがなわれている。…私はつぎの世紀には，頭示数が 1，2 度高いか低いかのために，数百万の人びとが殺しあうと確信している」（Lapouge 1878: 145–151）。ラプージュは，慣習，言語，歴史，戦争等を人種概念によって説明しようとしており，のちにデュルケームが固有の法則をもつ実在としての社会概念を確立するために戦わなくてはならなかったのは，この種の決定論であった（注 47 参照）。

20）たとえば啓蒙主義の最後の一員であるコンドルセは，つぎのようにいったという（ポリアコフ 1985: 225）。「私はあなた方と同じ色をしていないが，つねにあなた方を私の兄弟と見てきた。自然はあなた方を，白人と同じ精神，同じ理性，同じ徳を持つようにつくった」。

21）バーバは植民地主義的ディスコースの特徴を，無限の反復が可能な「他者性の固定性」にみている。「植民地的ディスコースの重要な特徴は，イデオロジカルな他者構築における「固定性」概念への依存である。植民地主義における文化的／歴史的／人種的差異の記号としての固定性は，パラドキシカルな表象の様式である。というのもそれは，厳格さおよび無変化の秩序と無秩序とを，退化と悪魔的な反復とを，言外に含むからである。同様に，その言説的戦術であるステレオタイプは，つねに知られつねに「その場」にあるものと，不安を引き起こしつつ反復されるべきなにものかとのあいだでためらう知識と同一化の一形態である。…植民地の言説を流通させるのはこのアンビヴァレンスの力である。それは変化する歴史的および言説的状況における反復可能性を保証し，その個別化と周辺化の戦術を伝え，蓋然的な真実と断言可能性の効果を生み出す…」（Bhabha 1994: 66）。本稿が論じているのは，ブロカ派の人種主義人類学がどのようにして固定的，ステレオタイプ的な「他者像」の建設に寄与したか，それがどのようにして植民地主義的＝帝国主義的実践を支える言説的根拠となっていったかを明らかにすることである。

22）ブロカらの人種主義の教説は，イギリスでも並行的に進行していた。「英国人種主義の真の創始者」（Curtin 1973-2: 377）と形容されるノックス（Robert Knox）は，1846 年に『人種論』を書き，そこで「人種がすべてである。文芸，科学，芸術，一言でいって文明は人種に依存している」と述べている（Knox 1850: v）。人間の歴史を人種間の闘争としてとらえるその人種差別的な歴史認識／世界認識は，ハントにうけつがれ，1863 年のロンドン人類学協会設立の運びとなった（Stocking Jr. 1971）。ハントがブロカの影響を強く受けていたことはすでに指摘したとおりである。一方，フランスではゴビノー伯爵が白人種の絶対的優位を説き，人種間の混血と闘争を歴史理解の鍵とみなす『人種不平等論』を 1854 年に出版している（Gobineau 1854）。1869 年までの世界の人類学の歴史をあとづけたブロカの報告は，このノックスやゴビノーに言及さえしておらず（Broca 1868），人種差別主義を共有しながらも，かれらを科学者としてみていなかったことを物語っていて興味深い。おなじように興味深いのは，人種主義教説のいわば教科書ともいうべきゴビノーの『人種不平等論』が，1882 年のかれの死まで再版されなかったという事実である（Gobineau 1854: xxi）。人種主義の言説は，この時代には科学の粉飾をまとわないかぎり広く受容されなかったのであり，状況を変

えたのは，のちにみるように，1880 年代以降の反ユダヤの人種主義の一般化であった。

23）　かれらの考古学への関心の背後には，キリスト教イデオロギーへの挑戦があった。聖書の創世記にしたがうかぎり，人間の歴史は 6 千年を超えることがないと当時信じられていたのに対し，これらの考古学遺物が示唆していたのは数十万年前の人間の存在だったからである。

24）　この数字がいかに例外的であったかは，当時のパリ大学の学生数と比較すればよくわかる。1876 年のパリ大学の文理両学部あわせた学生数は 531 であり，資格取得にむすびつく医学部と法学部をあわせた全学生数も 11,000 にすぎなかった。しかもこの数字は，全学年合計の登録数だったのである（Fox & Weisz 1980）。

25）　たとえば，この人類学学校の教授のひとりであるシャルル・ルトルノーは，1891 年からの 10 年のあいだに，『結婚と家族の進化』『諸人種における法体系の進化』『諸人種における商業の進化』『諸人種における奴隷制の進化』『諸人種における教育の進化』『諸人種，諸文明における女性の地位』などの著作を矢つぎばやに出版している。これらの著作を通じてかれが証明しようとしたのは，西ヨーロッパ人を頂点におく産業と社会組織の発展の見取り図を描き出すことであった。たとえば『民族誌学にもとづく社会学』のなかで，かれはつぎのように述べている。「社会学的な観点からいえば，これらのさまざまな人間的刻印は，そのあいだに種々の下位分類を含むとはいえ，きわめて不平等なものである。黒人は自分たちだけでは，他の優越人種と一緒でなかったなら，一度も発達した文明を作ることはなかった。この点においては，黄色人種，とりわけモンゴル人ははるかに優れている。そのなかのもっともすぐれたアジアのモンゴル人は，賢明に組織された大社会を建設したし，たとえば中国社会は白人の文明に対抗し，そのモデルとなることも可能であった。…人間集団のうち，頂点にくるのは今のところ白人種である」（Letourneau 1880: 4）。人種概念を梃子として人類史を再構成しようという試みは，このルトルノーにかぎらず，オヴェラック，モリチエなどの他の教授たちとも共通するものであった。

26）　ここにおいても，英国人類学界との並行関係を認めるべきであろう。1871 年のタイラーの『原始文化』は，その斬新な文化の定義によって近代人類学の出発点として評価されてきた。「文化ないし文明とは，知識，信仰，芸術，道徳，法，慣習その他，社会の成員としての人間によって獲得された能力と習慣を包摂する総体である」（Tylor 1929-1: 1）。しかしながら，タイラーが文化をつねに単数形でもちいていたこと，したがって地球上のすべての文化的偏差を人類の進化の階梯上に位置づけていたこと，を押さえなくてはならない。人類学史家ストッキング・ジュニアのつぎのことばは，進化論的人類学が，つぎの世代の認識様式の出現にとって障害となっていたという理解を示している。「ヴィクトリア期中期に定式化されたイギリス人類学の研究は，社会理論より，むしろ古代と自然史に向かうものであった。…いずれにしても，その種的な文化的存在様式の複雑さは，一般的な進化論的プロセスにしたがうという以外いかなる有意的な概念的統一性をもたない，非連続的な物質的／行動的要素として断片化されていた」（Stoking Jr. 1987: 273）。「20 世紀初頭の英国における近代的社会人類学の出現にとって，人類学会に具体化されていた幅広い伝統は，ある種の人類学者にとって自己定義の手段であるより，むしろその障害としてあらわれていた」（ibd.: 269）。

27）　パリ市の人口は，1801 年の 55 万人が，45 年後の 1846 年には 100 万人の大台を超え，世紀の変わった 1901 年になると郊外をふくめた人口が 270 万人にまで達している。当時の人びとにそれは，「怪物のように巨大なパリ」と映っていたのである（シュヴァリエ 1993: 180）。

28）　ルボンは，この 1895 年の『群集心理』の出版に先立って，「頭蓋骨の容積変化と知性との関係の法則に関する解剖学的数学的研究」などの論文（Le Bon 1879）を『人類学雑誌』に寄稿しているほか，『人と社会──その起源と進化』（1891 年）『民族進化の心理法則』（1894 年）に書いている。これらの著作は，かれがパリ人類学校で知的訓育を受けていたことを如実に物語るものである。1879 年に書かれたつぎのことばは，かれの差別的な女性観を明白に示しているが，それを大衆へと拡大解釈したのが，かれの「群集論」にほかならなかった。「パリ市民のようにもっとも知的な人種のなかに，もっとも発達した男性の脳よりもゴリラの脳の容積に近い脳をもつ女性がたくさんいる。この劣等性はあまりに明白であるため，一瞬たりともそれに異議を唱えることはできず，その程度について議論できるだけである。小説家や詩人以外の女性の知性を調べた心理学者はみな，彼女たちが人間進化のもっとも劣った形態を示していること，文明の成人男性より子どもやサベージに近いことを認めている。彼女たちは気まぐれで，不安定で，論理と思考の能力を欠き，推論の能力をもたず，将来の

計算をせず，衝動の赴くままである」（Le Bon 1879: 60–61）。

29）19 世紀の初頭には，パリの 2 大日刊紙の発行部数が 2,000 部ていどであったのが，1900 年には 4 つの大衆紙あわせて 100 万部を超えるまでになっていた（ボウルビー 1989: 107）。この間の事情について，ボウルビーはつぎのように書いている。「これら 3 つの国における初等教育の普及と，それと平行する識字率の拡大は，潜在的読者数の飛躍的増加を意味し，本と新聞を買うはじめての労働者階級の市場を生み出した」（ボウルビー 1989: 106）。

30）くわしくは，竹沢（2001），平野（2002）参照。

31）かれが「生理学者」の名でだれのことを考えていたかは，著書の言及がないので明らかでない。この時代にはブロカの著作がきわめて限られていたことを考えるなら，ブロカの師匠格に当たるフランスのエデュアールやイギリスのプリチャードであると思われるが，今のところそれを確認する手段がない。

32）以下のフランスの植民地統治の特徴については，竹沢（2001）を踏まえている。

33）フェデルブは着任するとただちに軍事改革に着手し，それまで奴隷を中心としていた現地兵を改革して，階級とサラリー制を導入することで士気を高めて強固な軍隊をつくりあげた。のちに「セネガル兵」と呼ばれて，世界中に派遣されることになる部隊の基礎はここに固められたのである。また，たえざる戦争によって拡大した支配地には，換金作物としての落花生栽培を導入し，植民地の経済的自立を可能にした。さらには，支配下の首長の子弟をダカールに集めて学ばせる「人質学校」をつくり，支配の保障とその再生産体制を築いたのもこのフェデルブであった（竹沢 2001）。

34）フェデルブはそれにとどまらず，セネガルの諸民族であるセレール，フルベ，モールなどについても知識があったようである。かれはこれらの民族の言語について，何冊かのマニュアルを書いている。またかれは，現地のイスラームを重視し，公文書にはフランス語とアラビア語を併記させるなどの「現地式」の統治方式を導入した。

35）フェデルブ自身，アフリカの人びとの特徴を説明するのにブロカ派の語彙をもちいている。「外部の影響にもかかわらず，ウォロフは一般に自然が彼らに与えた長所と短所を保持してきた。彼らは温厚で，信頼した人間に対しては大いなる忠誠を誓う。イスラーム教徒になった黒人はとてもしばしば嘘つきで偽善者になり，キリスト教徒になった彼らの多くは不幸なことに酔っ払いになる。一般的にいって，ウォロフは大きな子どもであり，そのように扱わなくてはならない」（Faidherbe 1883: 4）。

36）こうした海軍と中央政府との関係は，組織のあり方を反映したものであった。内務省の直轄であったアルジェリアと異なり，アフリカやインドシナの植民地は海軍省の管轄であり，1894 年に植民地省がつくられるまでこの状態であった（Kanya-Forstner 1969: 6）。

37）アーレントはこういっている。「真の帝国の構造というのは，本国の政治諸制度がきわめて多様な方法で帝国に移しかえられて帝国の骨組みを作るものとなっているのだが，これに反し帝国主義の場合には，本国の国民国家的諸制度にある程度の監督権は認められているものの，植民地行政がそれから完全に離されているのが特徴である。この分離は，…「後進民族」や「劣等人種」に対する尊大さが原因である」（アーレント 1972-2: 14–15）。こう述べてアーレントは，フランスにおいてもイギリスにおいても，人種主義的意識が近代の植民地主義の鍵であったことを指摘するのである。

38）人種主義を核とする差別意識とそれが可能にした境界設定は，本国と植民地の人びとのあいだだけでなく，性や階級，規範，地域などのラインに沿ってどこまでも延長可能であった。「下級階級の女性と犯罪者は，多くの点で異なるかもしれないが，サベージとの類似性を共有していた。そのように等式化された社会的カテゴリーは，きわめて拡張可能であった。犯罪者に加え，女，子ども，農民，田舎人，労働者，乞食，貧乏人，狂人，アイルランド人であり，このすべてがときにサベージや「未開」人に結びつけられたのである。…かれらに共通していたのはある種の精神的特徴であり，それによってかれらは知的・倫理的発展のスケールのなかで低い地点におかれていた」。（Stoking Jr. 1987: 229）。産業発展と「民主化」の進行した 19 世紀後半であったが，これらの人びとはすべて「依存と監督の対象」とされていたとストッキング・ジュニアは指摘している。

39）人種主義は植民地拡張事業によって支えられつつ進行・普及したが，それをヨーロッパ諸国民に広めたのは，同時期におこなわれた各種の催しであった。まず，1870 年代いらいヨーロッパ各都市で開催され，多くの観客を集めた非ヨーロッパ人展示の「人間動物園」であり（Shneider 1982; Bancel et al. 2002），1878 年のパリ万国博覧会いらい万博の定番となった「土人の村」であり（竹沢 2001），ジュール・ヴェルヌらの冒険小説の流行であり，人間と社会

の「進化」に沿って世界の諸民族の展示をおこなった民族学博物館の設置であった（竹沢 2002）。

40）デュルケームの死後，追悼文をしたためたジョルジュ・ダヴィは，リセの同級生のことばを借りてつぎのようにいっている。「かれはすでに教育職以外のものに召されていたように感じていた。かれは教義を作りだし，学生ではなく弟子をもち，敗戦によって傷ついたフランスの再建のためにある役割を果たすことが必要だったのだ」（Davy 1917: 188）。

41）以下の部分は，（竹沢　印刷中）によっている。

42）この点について，『社会分業論』の訳者である田原音和はつぎのように述べている。「デュルケームの社会学理論は，その主要な特徴をほとんど『社会分業論』のなかに含んでいる。もちろん，明示的なものもあれば暗示的な萌芽にとどまっているものもあり，のちに捨てられる仮説もある。しかし，どちらかといえば，かれの社会学の輪郭と主要な筋線は，ほぼこの書物によって定められたといっても過言ではない」（田原 1971: 446）。合衆国の著名な社会学者であるベラーも，おなじ見解である。「かれの著作のなかでも，それが（＝『社会分業論』）が幹であり，かれのすべての他の作品，傑作である『宗教生活の基本形態』を含めたそれは，枝にすぎない」（Bellah 1973: xxiii）。

43）分業と私有財産に由来するこれらの社会問題を資本主義の必然の帰結とみなし，それに対する解決策を社会構造の根本的変革のかたちで提示しようとしたのが，マルクスに代表される共産主義者／社会主義者であり，プルードンらのアナーキストであり，ルイ・ブランらのサンディカリストであった。デュルケームの社会学は，かれに先行したこれらの社会思想／社会運動に抗するかたちで構築されたのである。

44）この点にこそ，『社会分業論』のもっともオリジナルな貢献を認めるべきであろう。たしかにデュルケーム以前にも，20 世紀初頭のサン・シモンやヘーゲルなどの思想家は，社会をキイワードに独自の思考を深めていた。しかし，サン・シモンにとって問題は「ヨーロッパ社会」であり，産業の論理によってそれを再組織化することであった。一方，ヘーゲルは「市民社会」の概念を最初に提起した研究者とされるが，かれにとって「市民社会」とは，資本の運動と人びとの欲望が展開される「放埒な享楽と悲惨な貧困の光景」でしかなかった。両者にとって社会の外延は限定されていなかったのであり，社会を法の範囲と（それゆえ国民国家と）一致させ，それまで「危険な階級」（シュヴァリエ）としかみなされていなかった貧困層までを含んだ社会概念をつくりあげ，社会の全成員＝国民の総意を社会学の対象として規定したことは，デュルケームによってはじめて実現されたものであった。これらの点については，（竹沢　印刷中）で論じている。

45）「デュルケーム以降，社会問題はその構造ではなく，その紐帯の表象におかれることとなり，そこにのみ介入すべきだということになる。もし社会問題が，個人にとっても集団にとっても，社会のうちに存在する事実上の連帯の知覚の喪失に由来するとするなら，個人と社会を対立させることは無意味なことになる。事実，すべての問題は，社会的紐帯のあり方や，その知覚を伝える能力にあるとされるのであり，社会の構造そのものや個人の本性にあるのではけっしてないのである」（Donzelot 1994: 84）。

46）以上のことは，保守的な心性をもっていたデュルケームにはあてはまっても，その学派にはあてはまらない。マルセル・モースをはじめ，シミアン，フォコネ，エルツなどの若い研究者は社会主義に接近し，『社会主義運動』などの雑誌の出版に協力し，「労働者学校」で教えるなどしていた（田原 1983: 124sq.）。

47）「デュルケームとその学派の人びとは，この時代のもっとも有能でナショナリスティックな社会科学者であった」（Clark 1968: 45）。同様に，「第三共和制にとって連帯の概念がもっていたチャンスの理由を理解しようとするなら，それを戦術的発明として分析すること，保守主義者と革命主義者とに対するポジションのなかで，根拠も地平も不明確であった共和主義的実践の合理化として分析することが，おそらく最良であろう」（Donzelot 1994: 77）。

48）固有の社会学の構築に成功したデュルケームは，1903 年に同時代のいわば「社会学もどき」に対して厳しい批判をおこなっている。かれの批判の対象になったのは，なにより人類学学校で教えられていた人種主義的社会学であった（注 19，25 参照）。「この 20 年余り，私たちは社会学の文献が真に開花しているのを眼にしている。過去には希少で間歇的であった生産が，いまや連続的になり，新たな体系が日に日に構築されている。しかしながら，あらゆる体系がそうであるように，それはただひとつの問題へと導かれている。コントやスペンサーにおいてと同様，社会の進化を支配する法則を発見することが問題なのだ。ここでは模倣の法則，あちらでは適応の法則，生存競争の法則，そしてなにより人種間の戦いというわ

けだ」（Durkheim 1975: 129）。

49）　のちにファシズム運動へとつながっていくフランスの極右の理論家であったモーリス・バレスは，こう書いていた。「ドレフュースは裏切ることができる。私は人種からそう結論づけた。かれが裏切ったことを私は知っている。メルシエとロジェの名著を読んだからだ」（有田 2000: 328 に引用）。

50）　ドレフュースを擁護する教授陣に対して，カトトリック系の新聞を中心に猛烈なキャンペーンが張られた。「無知なこれらの大学人という人種は，…まちがいを教え，学生たちの魂を腐敗させ，やがては全体としての社会を腐敗させるために，その人生を費やしている」。というのも，かれらは「無神論的教育者であり，社会的害悪の要因であり，悪の主要な源泉，社会秩序の真の敵」だからである（Lukes 1985: 334）。かれらの講義はしばしば反ドレフュース派の学生によって妨害されたため，ドレフュース擁護派の学生の労働者は，かれらを大学において保護する必要さえあった。

51）　1905 年に統一社会党を結成するジャン・ジョレスは，デュルケームとリセで同期であり，高等師範学校を一番で修了するほどの秀才であった。のちにジョレスは，労働者の立場から第 1 次世界大戦の開戦に反対しつづけたことにより暗殺されるが，マルセル・モースが生涯にわたって敬愛した存在であった。第 1 次世界大戦の終わった 1924 年に書かれ，贈与によって結ばれる友愛的社会を描いた「贈与論」は，亡きジョレスへのオマージュであったと考えることは不可能ではないだろう。

52）「裁判の誤りに固執せず，はじめから正義，法の前での平等，市民的美徳，被抑圧者の自由というような＜抽象的な＞理念を――要するに，40 年後と同様，当時もすでに嘲笑されていたジャコバン的愛国主義の一切の武器をこの闘争に投入したことこそ，クレマンソーの攻撃の偉大な所以である」（アーレント 1972-1: 209）。

53）　ドイツなどの後発近代化国家が，しばしば血のナショナリズムを採用したことを，アーレントはつぎのように要約する。「後者は（種族的ナショナリズムは）もっとも無害な場合でさえ人間の内部に向かう方向をとり，人間精神を普遍的な民族特性の「具現」とみなそうとしている…。そして精神は何かを具現するものたり得ないことは明らかであるから，この欠点を補うために，精神と肉体のいわば逢引の場となるべき「血」が担ぎ出されるのである」（アーレント 1972-2: 170，カッコ内は竹沢）。

54）　この点は，フランツ・ボアズのもとで成長したアメリカ合衆国の人類学が，しばしば人種主義について言及していたことと対照的である。ベネディクト以前のボアズ派人類学者にとって，文化とは「計画性のない，ごちゃまぜのもの」「つぎはぎのもの」でしかなかったのであり（ローウィのことば，竹沢 2001: 233），こうした異質性から社会／文化がどのように構成されているかを研究することがその目的だったとすれば，異質性を生みだすメカニズムのひとつとしての人種概念の研究は不可欠だったのである。

55）　マリノフスキーはロンドン大学でおこなわれたその有名なゼミナールのなかで，学生に対してくり返しフランス社会学派の著作を読むように進めていたし，ラドクリフ＝ブラウンにいたってはみずからを「フランス社会学者のひとり」とさえ公言していた（竹沢 2001: 166）。デュルケームの直接の弟子の多くが，甥のマルセル・モースやエルツに代表されるように，社会学というよりむしろ人類学的な志向性をもっていたこと，社会学を革新したアメリカ合衆国のパーソンズがロンドン大学でのマリノフスキーの講義に出席し，そこに多くを学んでいたことを考えるなら，デュルケームの方法はまず人類学で開花し，そのあとで社会学を豊かにしたといえよう。

56）　デュルケームはかれの社会学をこう定義していた。「社会学は，諸制度およびその発生と機能にかんする科学と定義される」（デュルケーム 1978: 43）。ここに，レヴィ＝ストロースもいうように「機能にかんする最初の社会学的定義」がもたらされたのであり，それゆえマリノフスキーはデュルケームを「機能主義の父」と呼んでいたといわれている（竹沢 2001: 164）。

57）　この点で，デュルケーム学派のいわば盟友であった社会主義者ジャン・ジョレスが，植民地主義とナショナリズムに強く反対していたことは注目される。かれはすでに 1905 年ごろから明確に植民地拡張批判の論陣を張っていたし（喜安 1977），ふたつのナショナリズムのぶつかり合いとなった第一次世界大戦に対しては，それは資本家同士の戦いであるとして，暗殺されるまで反対を貫いた（木下 1963，村田 1999）。ここには重い課題が残されているが，社会主義が人種主義をのりこえる言説と実践たりえたかを論じることは，本稿の課題を超えている。

文　　献

有田英明
2000 『ふたつのナショナリズム』東京：みすず書房。
アーレント，ハンナ
1972 『全体主義の起源』3 巻，大久保和郎他訳，東京：みすず書房。
岩田昌往
1999 『ユーゴスラヴィア多民族戦争の情報源』東京：御茶ノ水書房。
ヴィノック，ミシェル
1995 『ナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』川上勉・中谷猛監訳，東京：藤原書店。
ウォルツァー，マイケル
1999 『正義の領分：多元性と平等の擁護』山口晃訳，東京：而上書店。
菅野賢治
2002 『ドレフュス事件のなかの科学』東京：青土社。
木下半治
1963 『ジャン・ジョレス　血塗られた平和像』東京：改造社。
キムリッカ，ウィル
1998 『多文化時代の市民権』角田猛之他監訳，京都：晃洋書房。
喜安朗
1977 『民衆運動と社会主義』東京：勁草書房。
グールド，ステファン
1998 『人間の測りまちがい』増補版，鈴木善次・森脇靖子訳，東京：河出書房新社。
シュヴァリエ，ルイ
1993 『労働階級と危険な階級』喜安朗他訳，東京：みすず書房。
タイラー，チャールズ
1996 『マルチ・カルチュラリズム』東京：岩波書店。
武内進一編
2000 『国家・暴力・政治：アジア・アフリカの紛争をめぐって』東京：日本貿易振興機構アジア経済研究所。
竹沢尚一郎
2001 『表象の植民地帝国』京都：世界思想社。
2003 「民族学博物館の現在――民族学博物館は 21 世紀に存在しうるか」『国立民族学博物館研究報告』28-2: 173–222。
印刷中「フランスにおける社会学の誕生」『社会学のアリーナ』友枝敏雄他編，東京：有信堂。
竹沢泰子
2003 「アメリカ人類学にみる進化論と人種」坂上孝編著『変異するダーウィニズム：進化論と社会』京都：京都大学学術出版会。
谷川　稔
1983 『フランス社会運動史――アソシアシオンとサンディカリズム』東京：山川出版社。
田原音和
1971 「解説」デュルケーム『社会分業論』pp. 435–466，東京：青木書店。
1983 『歴史のなかの社会学』東京：木鐸社。
タルド，ガブリエル
1964 『世論と群集』稲葉三千男訳，東京：未来社。
デュルケーム，エミール
1971 『社会分業論』田原音和訳，東京：青木書店。
1978 『社会学的方法の規準』宮島喬訳，東京：岩波文庫。
ハージ，ガッサン
2003 『ホワイト・ネイション』保苅実・塩原良訳，東京：平凡社。
バリバール，エティエンヌ・イマニュエル ウォーラーステイン
1997 『人種／国民／階級』若林章孝他訳，東京：大村書店。

バルザック
1959 「老嬢」小林正訳，『バルザック全集』8，東京：東京創元社。
平野千果子
2002 『フランス植民地主義の歴史』東京：白水社。
フーコー，ミシェル
2000 「真理と権力」『ミシェル・フーコー思考集成』VI，pp. 189–219，北山晴一訳，東京：筑摩書房。
フィンケルクロート，アラン
1988 『思考の敗北あるいは文化のパラドクス』西谷修訳，東京：河出書房新社。
ベネディクト，ルース
1997 『人種主義――その批判的考察』筒井清忠他訳，名古屋：名古屋大学出版会。
ボウルビー
1989 『ちょっと見るだけ』高山宏訳，東京：ありな書房。
ポリアコフ，レオン
1985 『アーリア神話』アーリア主義研究会，東京：法政大学出版局。
ホリンガー，ディビット
2002 『ポストエスニック・アメリカ――多文化主義をこえて』藤田文子訳，東京：明石書房。
萬年甫・岩田誠編訳
1992 『ブロカ』（神経学の源流 3）東京：東京大学出版会。
村田光義
1999 『ジャン・ジョレス研究序説』東京：尚学社。
森本哲郎
1996 『戦争と革命の間で――20 世紀システムの幕開けとフランス社会主義』京都：法律文化社。
山田登世子
1991 『メディア都市パリ』青土社。
リュフィエ，ジャック
1986 『生物学から文化へ』河辺俊雄他訳，東京：みすず書房。
ルボン，ギュスターブ
1993 『群衆心理』櫻井成夫訳，東京：講談社学術文庫。
レヴィ，ベルナール
1989 『フランス・イデオロギー』内田樹訳，国文社。
レヴィ＝ストロース，クロード
1975 『人種と歴史』東京：みすず書房。
ローレン，ポール ゴードン
1995 『国家と人種偏見』大蔵雄之助訳，東京：TBS ブリタニカ。
米山リサ
2003 『暴力・戦争・リドレス――多文化主義のポリティクス』東京：岩波書店。
渡辺公三
2003 『司法的同一性の誕生』東京：言叢社。
渡辺一民
1972 『ドレフュース事件』東京：筑摩書房。

Bancel, Nicolas, et al. (ed.)
2002 *Zoos humains: De la Venus hottentote aux reality shows*. Paris: La Découverte.
Bellah, Robert N.
1973 Introduction. *Emile Durkheim on Morality and Society*. Chicago: The University of Chicago Press.
Benhabib, Seyla
2002 *The Claims of Culture*. Princeton: Prinston U.P.
Bhabha, Homi K.
1994 *The Location of Culture*. New York and London: Routledge.
Birnbaum, Pierre
1998 *Les Fous de la République*. Paris: Seuil/Points.

Boilat, A. D.
1984 *Esquisse Senegalais*, pl. 21, 24. Paris: Karthala.
Bouglé, Cébastien
1909 *Le Solidalisme*. Paris: Marcel Giard.
Broca, Paul
1860–63 Recherches sur l'ethnologie de la France. *Mémoires de la Société d'Anthropologie de Paris* 1-1: 1–57.
1861 Sur le volume et la forme du cerveau suivant les individus et suivant les races. *Bulletin de la Société d'Anthropologie de Paris* 1ère serie 2: 139–204, 301–322.
1865 Histoire des traveaux de la Société d'Anthropologie de Paris. *Mémoires de la Société d'Anthropologie de Paris* 1ère serie 1-2: vii–li.
1866 Anthropologie, son but, son programme, ses divisions, et ses méthodes. *Dictionnaires encyclopédiques des sciences médicales* V: 276–300.
1868 Histoire des progrès des études anthropologiques depuis la foundation de la Société, *Mémoires de la Société d'Anthropologie de Paris* 1-3: cv–cxxv.
1870 Sur le transformisme. *Bulletin de la Société d'Anthropologie de Paris* 2ème série 5: 168–239.
Buel, J. W.
1971 *Heros of the Dark Continent*. Freeport: Books for Libraries Press.
Clark, Terry
1968 Emile Durkheim and the Institutionalization of Sociology in the French University System. *Archive européenne de sociologie* IX: 37–71.
Conklin, Alice
1998 *A Mission to Civilize: The Republican Idea of Empire in France and West Africa, 1895–1930*. Stanford: Stanford U.P.
Curtin, Philip D.
1973 *The Image of Africa: British Ideas and Action, 1780–1850*, 2 vol. Wisconsin: The University of Wisconsin Press (first ed. 1964).
Davy, Georges
1917 Emile Durkheim. *Revue métaphisique et du morale* xxvi: 749–751.
Dias, Nélia
1991 *Le Musée d'ethnographie du Trocadéro*. Paris: Ed. du CNRS.
Donzelot, Jacques
1994 *L'Invention du social*. Paris: Seuil/Points.
Durkheim, Emile
1975 Sociologie et sciences sociales. *Textes* 1: 121–159, Paris: Editions du Minuit.
Edwards, Williams F.
1841 Des caractères physiologiques des races humaines considérées dans leurs rapports avec l'histoire. *Mémoires de la Société ethnologique* 1: 1–108.
Faidherbe, le Général
1883 Notice historique sur le Cayor. *Bulletin de la Société de Géographie*, pp. 3–39.
Fox, R. and G. Weiz
1980 Introduction: The Institutional Basis of French Science in the Nineteenth Century. *The Organization of Social Science and Technology in France*. Cambridge: Cambridge U.P.
Fraser, Nancy
1997 *Justice Interruptus*. London: Routledge.
Gobineau, Le Comte de
1854 *Essai sur l'inégalité des races humaines*. Paris: Librarie de Paris.
Hammond, Michael
1980 Anthropology as a Weapon of Social Combat in Late Nineteenth Century France. *J. of the History of Behavioral Science* 16: 118–132.
Hovélacque, Abel et Georges Hervé
1886 *Précis d'anthropologie*. Paris: Adrien Delahaye.
Hugan, A.
1994 *Vers Tombouctou*. Paris: Gallimard.

Kanya-Forstner, A. S.
1969 *The Conquest of the Western Sudan, A Study in French Military Imperialism*. Cambridge: Cambridge U.P.
Knox, Robert
1850 *The Races of Men: Frangment*. Philadelphia: Lea & Blanchard (1st ed. 1843).
Kremer-Marietti, A.
1984 L'anthropologie physique et morale en France et ses implications idéologiques. Britta Rupp-Eisenreich (éd.) *Histoire de l'anthroplogie: XVI–XIX siècles*, pp. 319–351. Paris: Klincksieck.
Lapouge, M. G. de
1887 L'anthropologie et la science politique. *La Revue d'anthropologie*, pp. 136–157.
Le Bon, Gustave
1879 Recherches anatomiques et mathématiques sur les lois des varientes du volume et du cerveau et sur les relations avec l'intelligence. *La Revue d'anthropologie* 2ème série 2: 27–104.
Letourneau, Charles
1880 *La Sociologie d'après l'ethnographie*. Paris: C. Beinwald.
Lukes, Steven
1985 *Emile Durkheim, His Life and Work*. California: Stanford U.P.
Mucchielli, Laurent
1997 Sociologie versus anthroplogie raciale. *Gradhiva* 21: 77–95.
Quatrefages, Arman de
1843 La Florida. *Revue des deux mondes*, 1er mars, pp. 733–773.
1871 Histoire naturelle de l'homme: La race prussienne. *Revue des deux mondes* 15 fév., pp. 647–669.
Rabinow, Paul
1989 *French Modern: Norms and Forms of the Social Environment*. Cambridge: MIT Press.
Raffenel, Anne
1846 *Voyage dans l'Afrique occidentale*. Paris: Althus Bertrand.
1856 *Nouveau voyage dans le pays des nègres*, 2 vol., Paris: Imperimerie et librairie centrales des chemins de fer.
Shneider, Williams H.
1982 *An Empire for the Mass: The French Popular Images of Africa*. London: Greenwood Press.
Schiller, Francis
1979 *Paul Broca, Founder of French Anthropology, Explorer of the Brain*. Berkley and Los Angels: University of California Press.
Stocking Jr. Georges W.
1968 *Race, Culture and Evolution*. New York: Free Press.
1971 What's in a Name. *Man* 6: 369–390.
1973 *Researches into the Physical History of Man*. Chicago: University of Chicago Press.
1987 *Victorian Anthropology*. New York: Free Press.
Tylor, Edward B.
1929 *Primitive Culture*. 2vol., 5th edition, London: Murray (1st ed. 1871).